大圓鏡智

無邊光

如來の本體は絶對の大心靈態であることは已に說きぬ。大心靈體には相大と用大との二屬性を有つてをる。個人の心に知力と意志の二屬性を有する如くである。相大とは心靈體の上に明るき象相なので即ち大智慧である。心靈體が鏡の體とすれば智慧は鏡の明淨に喩へらる。用大とは大心靈の有する能力にて人の意志の如くである。如來の心相は法界に徧照する大智慧の光明である。喩へば日光の徧ねく六合に照り渡る如き心の光明である。

無邊光の四大智慧は個人の心理の觀念と理性と認識と感覺の四分類に例すべきものにて、無邊光に法身の四大智慧と報身の智慧との兩方面あり。法身の四智は天則秩序の理性として自然の一切萬法に徧ねく互れる理性である。四大智慧とは一大觀念態と

一大理性と一切認識の本源と一切感覺の本源とである。

斯の四智が萬物に內存して自然界の主觀客觀の本元と爲る。また萬有を生成する統一攝理の本源と爲る。また因緣相成し陰陽交感の造化の妙用の本源と爲る。また感覺作用たる客觀の色聲香味觸の相と爲る。此の四智が自然界の一切萬象の根元と爲る。また一切衆生の知覺も運動も悉く如來四智の萬物內存からして、吾人の感覺等と爲り乃至一切の心の作用の相象を現はせるものである。法身の四大智が萬物の中に存在してをるから人類の精神作用も其れが分に應じて顯現したのである。

法身の大**ミオヤ**が一切衆生てふ子等の智を向上させて、而もまた更に進みて如來の自境界なる佛智の光明界に歸趣させん爲には報身佛の四大智慧の光明を以て衆生の四智を開發させて、如來の自境界の中に攝めて一切の眞理を覺らしむ。

更に云はゞ自然界の物質心質と依正色心の相と爲り、また萬物を生成する秩序と爲りたり或は衆生の五官の感覺と爲り、外界の五塵と現はるゝも、悉く此の法身の四大智

の分類現象である。また更に進みて如來の淨き法界に攝められて佛慧の眼開けて如來の妙境界を照見し得らるゝのは報身如來の四智の光が衆生の四智を照し給ふたものである。

觀念態

一、法身の絶對的觀念態

二、世界相待(主觀、客觀)觀念

三、衆生の阿賴耶識(見分相分)

法身一大觀念態

吾人が現に寫象する處の世界の天體の星宿より、乃至山河大地動植物等に至る迄の森羅萬象の相と顯はれてをる物と、また一方に外界の萬象を寫象する處の主觀なる心との二面を爲してをるが、客觀界の一切萬象は主觀の心がなければ寫象することが出

來ぬ。客觀と認むる物と、また吾人の主觀の心とは、それが一大根元がなくてはならぬ。此の根元を法身の一大觀念と云ふ。

法身自體は主觀客觀の相待的でなく、之を統一する處の絶對的觀念態である。夫が世界の相待的の方面には物象心象の二現象と爲るも本質は同一觀念態の相待的現象と云はざるべからず。故に此の一大觀念も物心二象の本源なりと云ふことを得。

吾人の主觀なる心も客觀なる物象も本は同一法身の絶對觀念態の分類現とす。故に此の物心二象の本質同一なりとの理を明す爲に四種の觀を以てす。

今華嚴法界觀の會色歸空觀等の四觀を物心即一觀に轉用せば、

一會色(物)歸心觀

客觀の萬物の本質は心なのである萬象は主觀の心に歸す。主觀の心と客觀の物象とは同一本質である。氷炭相容れざる如きもので無い。向ふに見ゆる山河大地等の物象は自己の觀念が客觀化して現じた相である。實は自己心の相を向ふに見てをるのであ

る。向ふの物夫れ自體は何であるかは、物の象と現はれたのは自己の觀念の相である。若し自己の心が無ければ、外界の相は如何なる象相なるかは認識することが出來ぬ。故にすべて客觀の相なるものは必ず主觀の心に歸すべきものである。

(二)色心不二觀

主觀の心相と客觀の色相とは實は本質一體である。但し衆生が相待の見地よりして內觀を主觀と云ひ外觀を客觀と見る。見よ自己が頭より脚下に至る迄外部より見れば全體物質のみである。然るに同一の自己を內觀すれば全體精神である。故に物色と心象とは本來一體の兩面より色と心とに相待的に觀てをる故に、實は色心不二である。

(三)物心無礙觀

客觀の物の相と主觀の心の象とは本同一本質の物なる故に、相互に礙へるものでない。吾人の觀念は山河大地の內にも徹して碍げず。試みに冥想觀念して觀給へ吾人の觀念は大地の中にも徹照して毫も妨げず。されば吾人の觀念中の萬物とも云ひ萬物內

存の觀念とも云ひ得らる。吾人の主觀も法界に周徧して遺すことなく客觀の萬物も宇宙に徧在して餘す所無し。然も相互に障碍せず。同質異現なり。之を物心無碍觀と云ふ。

(四)物心無寄觀

宇宙は本來絶對觀念にて、宇宙自體は絶對にて主觀とか客觀とかの相待的のものに非ず。但し相待に規定せられたる衆生は客觀の物象と主觀の心象と見てをる。人間は自分から主觀とか客觀とか兩面に分けて見てをるけれども絶對者自身より見れば、主觀とも客觀とも別々に分別して居らぬ。絶對である。之を物心無寄觀と云ふ。

物質の觸覺は絶對心の意志

客觀の物象と主觀の觀念とは同一本質の相對現象なので、すべての物象も一大觀念の客觀的現象なることは已に會得せり。然るに物質には吾人の觸覺と感ずる重量とか

固形態とかの如き阻碍性を有して居る所より見れば、心は觀念なれば客觀も心なりとは會得し難し。山河大地及木石の如き觸覺に感ずべき固形態を何故に心なりと云ふべきぞ。答て曰く宇宙一大心靈に寫象と意志との二屬性を有す。意志とは心の力能である。例へば人に意力ありて力と爲り堅固と爲る如く、宇宙心靈の力能が客觀現と爲りて、吾人の觸覺に感ずべき物質となる。物質と心質とは同一本質の相待現象である。若し此理に於て能く了解し得ば、宇宙萬有は悉く一大觀念の相象にして、能觀の心と所觀の山河大地等の萬象とは同質の反對現相にして、一切の觸覺に感ずべき重力と固形態などは意志の力なりとす。

物心二相の理

客觀の物と主觀の心とは同一性なることは已に解しぬ。吾人能觀の心が所觀の相と顯然と判別することを得るは、同一質の反對現なる故である。同質の故に相關して障

げず。反對なる故に心は物相を識別す。すべて感覺の能力は反對の刺激の力をまちて顯然と現はる。能觀と所觀と全く融合して反對の相無くば、顯然たる刺戟を與へて主觀の心を意識すること能はざらしむ。例へば自己の皮膚の溫暖の程度と外間の暖度に於て平均なるときは、感覺鋭利ならず。有形の物質と無形の心質とに斯く反對現象ありて人をして顯然と意識せしむ。眼、眼を視ず、心心を識らず。同一本質なればとて主觀の無形に反對なる客觀の形色と顯はるゝ故に能く意識せしむ。能く此の理を會得せば萬有一大觀念の相對現象との義明ならん。

阿賴耶識

法身の自己の精神は一大觀念である。世界は相對的の故に一切の萬象が主觀の心と客觀の物象との反對の二面と現象してをる。其の絶對觀念を根底として世界相對に規定せられたる個體的存在を衆生心即ち阿賴耶識と名づく。一切凡夫の心相を阿賴耶と

云ふ。

法相家によれば一切衆生の本體なる阿賴耶識は法爾法然として自ら存在す。此の法爾の性が一切萬法の本である。此心識に無明薰習すれば衆生の心として六道に輪廻す。若し眞如が薰染すれば無漏の聖德現はれて佛果に向ふ。

阿賴耶とは藏識と翻ず。此阿賴耶の一面を見分と相分と自證分との作用を有す。

見分とは主觀にて相分とは客觀を云ふ。謂く外界に現はれたる山河大地等の一切の客觀現象なるものは、自己の阿賴耶が向ふに現はれたので、自己の心の外でない。又自己の主觀と現はるゝも、客觀の相分も、本同一阿賴耶の相待的現象であると。然るに一切衆生各自己の心の業道に差あり。從つて必ずしも一定して居らぬ。地獄の衆生は地獄の阿賴耶を以て地獄の苦の身と苦の世界とを感ず。餓鬼は餓鬼の阿賴耶を以て餓鬼の身と世界を感ず。人間は人間的に客觀の事物を感見してをる。之を阿賴耶の境界と云ふ。

阿賴耶の現境が六道各々姿が別々に觀するのは、賴耶の本質は同一なれども、之を組成する處の化合性が特殊的と成りて、例へば水の本質は同一なれども、混淆物の爲に種々性質を殊にする如く、同一本質の賴耶が六道の異熟種と爲りて、地獄の業を以て、地獄の因と地獄の緣とによりて、地獄の結果を成熟する時は心性も相も體も能力も悉く地獄型を造る故に、身も心も感ずる世界も悉く地獄ならざるは無い。六道悉く其の型式を殊にして、心と身と國土とを自己の賴耶に相應して觀するは、是れ同一質の道業の化合特殊なるに依るものとす。

大圓鏡智

報身の大智光明は普く十方三世の一切を照して遺すこと無きを大圓鏡智と名づく。即ち如來一大觀念の光を以て、空間的に十方無盡の世界山河大地一切の植物等の依報

十界衆生の正報、無量衆生の色相心相一切の萬象をば、炳然として大圓鏡の中に映現す。

天然の人の心を識と名づけ、未だ琢磨せざる珠の如き狀態である。天然の人は自然の界の中に在りて自己の觀念は本一大觀念を本體として其の分なることを明らめず、一大觀念と自己の心との間に隔てを爲してをる。此肉の個體を自己として天地を自己外の物として觀てをる。

自己の心源を開發して全く大圓鏡智の光明に照らさるゝ時は自己の本心即ち一大觀念にて一體不二宇宙一貫して無碍なることを觀見す。之を鏡智下に攝取せられたる人とす。之を識を轉じて智と爲るものとす。

楞嚴經

楞嚴經の大意は、各々個々の心は本來一大觀念態即ち如來藏妙眞如性であることを明了に觀ぜしめん爲に說きなされた。佛阿難に對して、汝が眼を放つて山河大地等を

視るものは心性が有るからだらう。然らば向ふの物が見ゆるのは此方から見る心性が出でゆきて視ゆるのか、但しは向ふより色射を爲して眼に映寫するものであるか、何れにしても視るも心の作用としてならば、心が向ふに行くのであるかまた向ふよりこちらに來るものであるか、向つて來るのでないかを、能く考へてみよとの徵問に對して阿難の思へらく、外界の物を視る心の性は、當方より向ふへ向つて行くやうにも思はる、また向ふより映射し來るやうにも考へられるので、如何にも確なる見解は能はぬ。

眼の見え耳の聽覺よりすべての感覺も亦客觀の色聲香味觸法の六塵も、また吾人の身體と心とを組成構成する元素なる地水火風空識大も、乃至世界一切の萬物も、實は悉く如來藏妙眞如性てふ一大心靈の變現に外ならずと。故に自己の心の自性なるものを能く開發したならば、宇宙一切無數の世界塵々悉く自己の心源一大觀念中の所有なることを明かにするを得んと。能く冥想して觀せよ、法界無邊の一切星宿無盡の世界

海は悉く自己の觀念内を出でざることを覺らん。吾人の觀念は本如來一大觀念體を以て根元とすればなり。實には吾人の觀念と一大觀念との間に本來障碍なきものなるを。天然の人は個體に拘束せられて、自ら懸隔を爲してをるのである。若しこゝに至ると大圓智中の人とす。未だこゝに至らざるを世界範圍中の人とす。

四大智慧と佛教の各學派

同じく佛教にして學派の異るは本同一如來の性相を各方面より觀する時に、自づと觀見を異にしたるものにて、例へば人の身體を見るに、解剖學的に研究すると生理學の對象として又は化學の對象として又は物理學の方面より生物學として說明することは各々其目的を殊にする故に其の見る方向も亦同じからず。其れの如くに如來の法體は絕對の大神靈態なれども、之を觀念として見るとき、また一大理性として見、また感覺の方面より見るとは其の觀見の法同じからず。

宇宙全體は即ち如來の法體である。法界の體性が即ち如來の法體である。夫に四大智慧は四方面また如來の四分類の智慧である。

法相唯識觀眞如觀、天臺の一心三觀、華嚴の法界觀等は觀念の方面より如來と及び法界の一切を觀するものとす。

三論の八不中道。般若の性宗及び禪の見性等は、平等性の方面より如來の自性に悟入するを目的とす。

眞言の三密相應入我我入の法、また華嚴の十玄緣起相即相入等の十玄緣起の如きは妙觀察智に屬す。

淨土の依正二報の莊嚴等は成所作智の方面に屬す。

今無邊光は四大智慧の各方面より如來の妙境に入るものとす。

唯識眞如觀とは吾人衆生の一切の身心國土乃至一切の境界は、本唯一の心より變現したる萬象である。故に一切五陰根身六道四生の身心國土も、悉く唯一の心より現じ

たるものなので、(心の) 更に進みて(眞如)一切萬法は悉く一大心眞如ならざるはなしと。全く眞如と契合するときは即ち佛となる。法相宗にては法界は一大觀念中の一切萬象に外ならざることを觀じて、其の究極に達すれば、唯識眞如を以て如來の法體と觀る。

天臺によれば、宇宙法界即ち宇宙の萬法を十法界に收む。十法界とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六凡と、聲聞、緣覺、菩薩、佛陀の四聖を合して十法界とす。宇宙間一切の衆生を此の十法界に攝して遺すことなし。十界に各相、性、體、力、作、因、緣、果、報、等、の十如を具す。地獄には地獄の相乃至果報あり。十界各然り。而して十界各其のいづれにも爲り得らるゝ性を有して居る。十界は各十界を具せる故に百界と爲る。百界各十如の屬性を有してをる故に、百界千如と爲る。此の百界千如が宇宙法界を構成してをる要素である。是が衆生世間と五陰と國土と三世間を爲してをる故に、三千の法として宇宙に存在してをる。無量無邊の身と心と國とが實在

するも三千の型式の中に攝められてをる。此の宇宙に徧在する三千の相性は本は眞空眞如の一理より變造せられたるものである。故に本體より見れば、眞空の一如の體である。變現の方より觀れば、三千の相性歴然として存在す。

一如の眞空より三千の現象と爲る。此の一の眞空と三千の妙有とは統一不離の關係ありて之を中道と云ひ、一面よりは空に、他面よりは三千の假相、之を統一する方との一體三面三面即一に之を觀す。然しながら本之れ一大觀念中の形式と內容とに互れる三面觀に外ならず。

華嚴の法界觀に依れば、一に理法界。二事法界。三理事無碍法界。四事々無碍法界。

理法界とは宇宙の本體は本來眞如の體性なので、一切の物心の二現象の一切萬有を事法界と云ふ。宇宙に徧在する處の森羅萬象乃至無量無邊の依正色心凡て法界一切の萬差の法界を事法界と云ふ。

理事無碍法界。本一體の眞如より現はれたる萬有なれば現象の表面より見れば悉く

萬物隔離せる個々の如くに見ゆれども其根底に於て萬有悉く一如であつて萬有の間最不可割の關係を有つてをる。

事事無碍とは一如と萬有との無碍なる如く、一如を體とする萬有なれば、萬有悉く內性の本質と力用とは相即相入の關係を以て互に相障礙せず。之を事事無碍と名づく斯の如く是等は大圓鏡中の一切の萬有なれば鏡智の光を以て觀ずる時は、宇宙法界を觀ず。佛敎中に一大觀念の方面より如來の相を觀ずるもの甚だ多し、今はたゞ其の大概を示すのみ。

（以上彌陀敎義）

大圓鏡智

鏡智の總相を明す

如來は宇宙一體の心靈なりと論しぬ。如來心の總相たる大圓鏡智の相を論せん。鏡智は法界一體の智相、宇宙に周遍して餘遺なきを大と曰ひ、三世に色心に照わたるを圓と名け、智相を鏡に例したるの義なり。法佛の鏡智を知らんとせば個體の佛身ありて其佛心が大なる鏡の如き智慧を以て十方三世を照らすものゝ如きと謂ふは非なり。法佛の心智は法界に周遍せる本來の智なるをもて、宇宙一切の色心二象が即鏡智の映現なりと信ずべし。報應二身は人格現なるをもて、其身相の大小を問はず、一々の佛の鏡智が普く十方三世一切の色心を照見すること大圓鏡の如しと信ずるも然らん。

頌に十方一切の色心は一大觀念の影像に外ならずとは、法身如來心の鏡智なり。

四智は如來心相を四面より觀したるものにて、鏡智は一大觀念、性智は絶對理性、察智は關係上の智、作智は感覺の智。

鏡智は色心二相と現ずべき本體にして、絶對觀念態なりとす。十方三世一切の色と心と依正の萬物が物象と心象とは相反對せる相の如くなれども、本は同一の觀念を主觀と客觀とに兩方面に現象したるものなれば、本來の本質にまで全く別々なるものにあらず。然れば十方三世の色心には十界の依正無量萬差、色相と心相とは、何れも相と現るるものは皆觀念の現象と云はざるをえず。一大觀念の主客二現象なりとすれば一切の現象はこのまゝが天體の星宿より乃至一切萬類の形質も心相も、みな鏡の面に現れたる影像と云ふべきなり。

萬物を映寫して現ずるにあらず、一大觀念中に發現す、而して物と心とは同じく觀念の現象なり。

此絶對觀念の中には、現象界も實體界も悉く含蓄せるものなり。此大圓鏡智は絶對觀念にして、十方法界十界依正身心發現の本質なれば、諸佛圓明の琢磨圓かに照せる智相も、無明煩惱に曇りたる迷心も、また昏朦鬱塞たる蠕動の心象も、觀念の主觀現にして、相好光明赫々たる佛身も、羸劣醜惡なる三惡道の色相も、みな同じく客觀現諸佛の淨土も穢土も等しく客觀現たるなり。迷悟相を異にし、淨穢色を殊にするも觀念の本質異なるにあらず。

眠つて夢境を現ずるも、醒めて現境を見るも、闇澹たる闇夜も日出も日夜闇明空體同じ。本覺眠りて識の夢境現ず。（本覺）

認識界と觀念界、現象と實體、自然界と心靈界と、主觀界と客觀界は、本絶對觀念界の兩面現に外ならず。吾人が感覺によりて經驗し得らる方面を認識界また現象界と曰ひ、また自然界とも曰ふ。此現象の裡面なる實體界は、吾人の五官をもて實驗しうること能はず。然れども直觀することをうるものとす。吾人が自觀的に觀ずべき大觀

念界を實體界とす。吾人が肉眼をもて經驗する方は分限あり、觀念の對象は分齊方隅あることなく、絶對無限なり。されば無方域の涅槃界の如きは實體界に求む。凡夫は肉眼をもて經驗する方面を指て明き世界と謂ひ、實體の方に對しては闇き如くに感ぜり。されども聖者は還つて之に反せりと。何にしても現象界も實體界も同じく絶對觀念を離れたるものにあらず。此兩界は觀念によりて綜合せらる。

次に、主觀界と客觀界に於ても、吾人が五官の對象となる處の色と聲と香と味と觸との境界現を客觀界とす。感覺及びすべての心象をさして主觀界と云ひ、この兩觀界は物心二象相反對の現象なれども、共に一大觀念の兩面現象なりと言はざるべからず

次に、佛敎に謂ゆる十界の依正、三千の假相、乃至十方微塵の國土と衆生と五蘊の色と心との象相は、悉く一大觀念の差別の現象なりと云ふべし。

冥々朦々たる三惡の依正色心、凡夫の茫々昧々たる色心の相、諸佛賢聖の晤明の相明闇其相を異にし、迷悟其象を殊にするも本一大觀念の象相たることは同じ。

諸佛の淨土衆寶莊嚴の相、諸佛の相好光明より、穢惡充滿の國土及び衆生の身色悉く一大觀念の客觀的の異種の顯現の象相なり。

經驗界の天體の星宿より、乃至地上の有機物無機物、乃至自然界の現象は、皆客觀的現象の觀念態なり。

同一觀念界に在つて、無明の眠醒めて十方三世に圓照せるは諸佛の鏡智。無明に翳せられて唯認識界のみを經驗することをうるは凡夫。昏々冥々たるは蠕動の族。睡眠の狀態に在て意識毫しも醒めざるは植物の類なり。

迷悟闇明を問はず、淨穢善惡に拘はらず、一切の色心二象は、悉く一大觀念の主觀と客觀との兩現象なりと云べし。

如來の鏡智とは一大觀念に名つけたるものなれば、宇宙一切天地萬物乃至諸佛淨土より衆生のアラヤ識の、乃至諸佛の大鏡智、皆な是法佛如來の大圓鏡中の影像なりと曰ふべきのみ。十方三世一切の色心、十界依正、乃至塵刹萬差の色相と心相とは、悉

く一大觀念の發現なり。法佛の鏡智は萬物を反映するにあらずして發現的現象なり。

十方三世一切の依正色心の所現の相は因果的に生滅變易す。紛々擾々たるも能現の本質は一大觀念體。絶對無限全體を通して一大觀念態なるが故に大と曰ひ、主觀客觀を通して本來同一の本質、一切を通して一體三世に徹して同時なれば圓と曰ひ、一大觀念の本質を鏡智に喩ふ。然らは十方法界微塵の刹土衆生色心は悉く其主觀と客觀との影像なりとす。此影像の本質は觀念態なりとす。若觀念的本質なき時は一切の色心現象あることなし。

此より主觀と客觀即ち物象と心象とは本同一の本質なりと云ふことを詳論せん。

頌に曰く、

色心共觀のます鏡、表と裡とに映り徹り、兩觀無碍は圓かにて、絶對圓なり。

物と心と主觀と客觀との兩界は、現象に於ては相反せる二現象なれども、其觀念的本質に於ては同一なりと云ふことを詳論するに、華嚴法界觀に倣ひて、四種の觀門を

開きて義を示さん。

一、色心共觀觀、二色心表裡觀、三色心無碍觀、四絶對無寄觀。

四種の觀門は要する處色心即ち客觀と主觀とは本質同一なりとの意義を觀照して意識すべき理を明す。

一、色心共觀觀

物と心とは共に同一の觀念態なりとの義なり。宇宙の現象界は吾人の寫象なり。然れとも客觀界は、吾人の主觀に對して過境的世界は實在なれども、本質は能觀の心と所觀の相とは、共に相應せる本質なりとすべし。客觀の物的實在は質碍即ち堅濕熱動の實在なりと感するは實は力の投合による。即ち物に觸れて固體と感する質碍は、因果的運動が、規律的に運動するを、物質と感するは、即ち意志の勢能なり。意志は力にして固體と感せしむ。然れば客觀の物の象相なるものは容觀觀念にして、質碍の固

體と感するは意志力による。即ち絶對觀念が力に依りて實現せられたる方を客觀界、即ち物象と感し、佗面を主觀、即ち心象とす。此兩方は物と心と二象反對に現はるれども、其實本質は同一觀念なりと云ふべし。

素朴なる實在論者の如く、客觀界は絶對的物質實在にして、自己の主觀とは本質よりして全く異るものと執するは甚だ錯れり。若し說の如く、客觀の物象と主觀の心質と本質に於て全く相異るものなれば、いかにして吾人の觀念的寫象を可能にせん。全く本質は同一の觀念なれども、世界の方面は意志力に規律に隨て實現したる客觀觀念なるが故に、吾人が觀念寫象を可能にす。同一の本質即ち觀念態を主客兩面に現じたるものとす。同一の本質を主客二面現象なればとて、觀念論者の主張する如く、客觀も全く觀念なりと斷ずべからず。客觀界は意志力によりて、運動し、變化し、因果律に隨て現出す。客觀を主觀に着色して寫象せる客觀界なるを。

カントが、客觀界は吾人認識の境にして、自己の觀念を客觀化して認識するのみ、

實在は超絶にして吾人の認識は實在の眞相を識るものにあらず。唯自己の主觀の現象を認むるのみと。又唯識論者の、アラヤの見分相分、共に同一のアラヤ識の現象自己が自己の識を客體化して之を認識するのみにして、一本質即ち大圓鏡智は超絶なりとす。

唯識觀念論者の說は、個人を中心として、未だ個人觀念は一大觀念の根底に立つて自己は其一員たるをいはざるなり。今は如來心の鏡智即ち絶對觀念を一切主觀客觀の本質根底として主觀客觀は一本質の兩現象なりとす。

二、內外一體觀

主觀と客觀とは同一本體の兩現象なりとす。主觀の心質と客觀の物質とは其質全く相反對せる異れる如き觀あれとも、其一體兩面觀なりと云はさるへからす。物心二界は同一觀念を內外二面より見たるものと言ことをうべし。自身は外面より觀れば頭よ

り脚に至るまで全體物質ならざるはなし。若内觀する時は全體精神なりとす。自己の實驗は之を一切の人類に推論することをうべし。人類同一の外觀は物質にして内觀は精神たる如く之を一層推し擴げてすべての動物に及ぼすことをうべし。また動物と植物とは内的生活形式に於て同一形式なればすべての有機植物にも及ぼすことをうべし乃至無機物に通じ自然界全體に通じて、外觀は物質にして内觀は精神なりと推論することをうべし。致一哲學は内界外界致一、現象には異るも根底に於ては致一し、形而上學は現存と意識との本質同一なるを論し二面を包括せる宇宙は一體一大觀念態に達すべし。物質と心質とが致一の理は宇宙全體に通して一大觀念を客觀主觀の兩面より觀じたるものと、現存の内容は觀念的にして實現の方面は意志の活動なり。内面の動機として理性の秩序として外界には因果的に現出す。主觀と客觀との二者は本同一觀念態の兩面觀なれば、其本質不二なりと云ふも現象の異なることは否定すべからず。

宇宙の内觀は一大觀念なり。一大觀念が内容の理性によりて、意志に發動せられて

秩序が外面には因果律の關係をもて萬有を顯現す。

內外即ち主觀界と客觀界とは同一觀念を內外兩面より觀するものにして、其本體即ち一大觀念態如來大圓鏡智なりとす。

三、物心無碍觀

客觀の物質と主觀の心質とは本質同一の故に、吾人の觀念は物心を通じて無碍なりとの理を論ず。物質の質碍なるものと主觀の心質とは本質互に相背致し氷炭相容れざるものと言べからす。此兩界の本質は本同一にして意志實現を物質と云ひ、內面を心質と言ひ、此二質全く相異なるものなれば、物的實在を通して吾人の觀念は無碍なることを能はざるべし。然るに吾人は自から實觀することをう。若し冥想觀念する時は廣延質碍の存在物あるに拘はらず、萬物を貫徹して世界一體觀に達するにあらずや。吾人の觀念なるものは、地球及ひ萬物を通じていかなるものも障碍することなく、宇

宙一體無碍觀なり。

森然たる萬象擾々たる萬物は一大觀念なる大圓鏡に影現せる影像のみ。一面に客觀的の物質影像現するにも拘はらす、觀念の本質は無碍なるは、即ち一大觀念界を發見して、物質實在を有しながら、佛界無邊際なるを建立することを得る所以なり。

意志に實現せられたる因果的物材と、感覺的心象とは相碍を免れざるも、觀念は一切を通して無碍なり。時間空間と物體とを貫き、靈徹靈通一體無碍の故に、物心無碍觀と云ふ。

四、超絶無寄觀

主觀と客觀は其本質に於て本同一なるが故に吾人の觀念が兩界を通して無碍觀をう進んで超絶無碍觀とはすべて機を離れ法身の本然の體を觀念體として名づけたるなり。其故は主觀と曰ひ客觀と曰ひ、是二面觀は吾人が自己の見地より分別したる名な

り。宇宙本然自性の本體の相は、主觀に非ず客觀に非ず、內に非ず外に非ず、絕對無寄の一大觀念態なり。言ひ換れば、吾人の如き個人等が自己勝手に主觀客觀を分別するまでにて、現存其ものに主觀も客觀も有ることなし。然れども吾人が最深の觀念に入つて自己の觀念と宇宙大自觀と契合する處に到つて、自ら本質と一致すへし。絕對的觀念非內非外非中間、一切相待を超絕し、言語道斷、心行處滅、若し强て表明せば絕對的觀念と云ふべきのみ。本體の本質內容にはいかに無盡の性德を含藏するやは吾人の爲に過境的なるも、其形式に於て少くとも吾人の自觀と大觀とは吾人の心靈開く處に於て一致したるものと信ず。

宇宙實在本質の相は絕對觀念にして、主觀客觀の兩面現象は意志に實現せられたる特殊的なるは個々の身にして、宇宙は絕對意志の統一的總體にして、全一の絕對的觀念の本體にして永恒本然たるは如來大圓鏡智なり。鏡智と絕對觀念とは同一にして如來心王を相の方面より見たるものなり。

鏡智とアラヤ識

一大觀と認識

鏡智は賴耶識の根底なりとす。賴耶識とは唯識家が個人及ひ天地萬物の原理を賴耶識と爲す。賴耶は藏の義。謂はく衆生心に一切萬法を含藏して、根身と此器界もみな自己の心識の變現する處なり。主觀界を見分と曰ひ、客觀界を相分と名づけ、客觀なる萬物と現るるも其實は自己の賴耶の客觀化して彼方に現はれたるに外ならず。若し自己の心生ずれは萬法生じ、若心滅すれは客觀も共に滅すべしと。此賴耶識は異熟識と云つて因緣業作によりて種々に變易す。有漏の種子ありて六道種々に生を變じ相を易ふ。而して人間の業によりてラヤが人間と熟する時は心も身も世界もみな悉く人間と相應して現ず。されば人間が現に經驗しつゝある境界は人間自ら之を實に世界は恁るものと認むるものの實在其ものは過境的にして吾人の實驗すること能はざる處なり

と。是凡夫有漏の業によりて賴耶識として恁く認識しつゝあるものの、若し無漏の聖智を得て賴耶識が一轉して大圓鏡智となる時は、主觀界も客觀界も共に一變して法界を盡して大圓鏡中の影像なりと。唯識によれば、賴耶識と鏡智とは其根底を異にして衆生有漏の賴耶識は本然に恁る自爾の性にして、三祇の修行によりて正覺を成ずる時に、更に鏡智が成するものゝ如くにす。

今は華嚴等の實大乘と同じく、唯識に謂ゆる賴耶なるもの即ち吾人の觀念なるものは、個人々々に自觀とするも、其根底に於ては本一體にして、即ち宇宙全一を盡しての一大觀念態の一分が即ち個人精神の觀念と現じたるものとす。然るに未だ心靈開發せざる間は、自己の精神は宇宙全一の精神の一分たることを意識せず。是個人の自觀なるものは特殊的のものと識る。若し心靈開發する時は自觀は宇宙大自觀と本一體なることを觀ず。

實大乘によれば、宇宙一大觀念中の自己觀念なりと說き、唯識には自己の觀念を賴

耶と名づけ、個々根本的に特殊の如くに謂へり。實は絶對觀念即ち鏡智の一分が個人の自觀即ち賴耶識と名づけたるものなりとす。

個人の方面からアラヤ識と名づけ、全體を鏡智と曰ふ。心靈開發して鏡智と合一せるをまた鏡智と爲す。

鏡智と認識

哲學に唱る處の認識界とは、即ち鏡智の現象の方面たること、また賴耶の見相二分の關係に現はれたるなり。

認識を研究するに古來見解區々たり。實在論、實在的經驗論、實在的唯理論、觀念的經驗論、觀念的唯理論等あり。鏡智の影像たる認識を研究するに、今暫く實在論と觀念論等擧て、唯實在と唯心とは兩偏執にて唯一方に偏するが故に眞理にあらず。相方を調和し統一してこの認識は全く鏡智の分現たるの理を明さん。

實在論者は謂へり。現在吾人が目擊する處の認識は實在の精確なる模寫なりと。吾人の寫象は客觀事物の本質實相を確實に完全に示すものなりと。實在論者の說は質朴なる凡夫の見解に近し。次に觀念論者は曰く、吾人の寫象と事物即ち思想と實在とは全然相容れざる異れる性質なりと爲す觀念論者は、實在論が執する處の認識は客觀事物を有のまゝに寫象し、外界には吾人の主觀と離れて運動の物體には色聲等の性質を備へたるものありて、吾人の感覺は之が實相を寫象し、こゝに於て認識生ずと。

觀念論者は實在論を難じて曰く、說の如く實在を實に感覺するものにして、實在を離れて認識の本質なしとせば、夢幻及ひ錯覺また熱病者の所見の如きは、物質實在なきに種々の感覺あるは何ぞや。また次に觀念の思考に存する認識數學の理の如き感覺にあらずして思考によりて認識するにあらずや。

生理學によるも、例せば皮膚を刺して痛を感ずるは實在論者によれば其痛覺鍼にありと云へし。然れども其實痛を感ずるは鍼にあらずして人の皮膚にあり。其佗色あり

聲ありと雖も人の眼耳等のなくんば之を感覺すること能はざるべし。物質の刺激は人の官能を刺す力の性質にして感覺し知覺し得るは人の主觀に存せり。

之に由つて觀れば、素朴の實在論は破れざるを得ざるへし。物體には廣延質碍の性を有す、即ち感覺を惹起すへき力を具ふるも、全く可感的性質は實在の表象のみと。若し主觀の感性なくば廣延も固體も認識すること能はざるべし。

絶對的觀念論によらば、吾人が認識は自然界に時間空間の因果的性なるものは決して過境的實在に屬するにあらず。そは主觀の產物なり。言ひ換ふれば外界の物象は物質其物に在るにあらずして、自己の精神的形式が客觀化して之を見るのみと。吾人か認識の自然界たらしむるものは主觀にあり、自己の精神を客觀として認識するものなり。而して吾人が認識する世界萬象は皆現象にして、實在の實相にはあらず。實相は過境的なりと。

唯識論の立脚地は絶對觀念論と同じく、人の主觀と客觀の本質は眞如の實體とは超

然的にして、本來一致すへきものにあらず、實體と現象とは其本質に於て超然的なりとす。之を超然的觀念論とす。

或人は主張す。吾人の經驗しうる自然界を認識界と云ひ、實體は唯直觀すべきのみと。言ひ換ふれは感覺の對象を認識と云ひ觀念の對象を實體界と爲すと。

實大乘は、實體と現象とは同一本質にして、實體を離れたる現象なく現象即實在論なり。然れば即ち認識界と直觀界とは一體の兩面にして摠して之を大圓鏡智に屬す。

また唯識論は個人精神を賴耶識と名づけ、全體精神の相を大圓鏡智と爲す。若し實大乘によれば個人精神は一大精神の一分にして、全體精神を離れて個人精神あるなし然らば即ち賴耶識とは其實大圓鏡智の一分たるに過ぎず。言はば一大觀念の大虛が吾人の心窓に顯はれたるものを名つけて賴耶識とは云ふなり。

若し個人の自觀を開發する時は一大觀念と契合す。之れ即ち其理に於て大圓鏡智に合一したるものなり。唯識論者の說くが如く個人精神の轉じて全體精神が成りたるに

あらざるなり。本來全體觀念の一員たる個人なれば心靈開發する時は、一大觀念即ち鏡智顯現するなり。

頌に曰く、

大圓鏡智に契ふとき、十方三世の色心も、圓かに照すみかゝみに、同時にすべては現るれ。

論じて曰く、衆生の賴耶識が轉依して鏡智となるとは唯識家の論する處、彼は權大乘の敎の故に、未だ全く了義敎にあらず。衆生の精神本如來心の一分なるが故に、心靈開發するときは如來心と合一す。即ち自己の觀念が一大觀念と相應するにいたる。亦能觀と所觀と一致の故に。若し人菩薩が正覺を成ずる時、無始の無明頓に除盡し長夜の眠醒め來るが故に、大圓鏡智の日輪は圓かに十方三世の色と心と依と正と及び一切の萬法は悉く大心鏡中に炳然たり。自己一大觀念中の十方依正なれば遠近大小の相なく、また時間的にも過去未來現在は同時態にして、現在の當念に現在す。されば佛

陀は曰く過去無量劫の大通智勝佛も尙今の如しと。

衆生の觀念は本鏡智の分なれども、心鏡曇るが故に圓明ならざるのみ。宇宙全一の大觀念態が鏡智とすれば、吾人の觀念もまた其一分たり。吾人は觀念に於て一大觀念と關聯せり。然れども吾人の觀念は昏瞑なり、闇夜の如し。宇宙に對しては實に少部分たるなり。

感覺と觀念

吾人が肉眼をもて大空に向ふときは廣く外に向ふ如く觀ずるなれども、其實は隘きに向ふなり。いかにとなれば、吾人が器械的の眼は自然に規定せられて眼界に涯畔ありて空間もまた分限あり。フエヒネルが人の感覺は鐶の內に向ふが如しと、實に然り之と反對に、吾人が觀念をもて宇宙に對する時は、其觀念界は分限あることなし。宇宙は無限なり。其空間に於て限りなく時間に於て窮りなし、即ち無限無邊なり。吾人

は無限なる宇宙に對しては、とても其邊際の有無をだも了解すること能はざるなり。況んや其内容の無盡なる理事に於ては、吾人の意識の域にあらざるなり。宇宙の無限なる天文學者の説によるも、太陽の光線が此地球に達するの時間は約八分なりと。然るに天眼鏡をもてせば千五百萬年を要して初めて其光線が此地球に達しうる遠距離の恒星を認むることをうと。其距離の遠大なること實に無限なり。然れとも全宇宙の無限に對する時は、無量百千萬分の一にだにもあらざるべし。いかに無限の遠距離と雖とも、吾人の觀念は達し得ざると云ふ理あることなし。ハミルトンが我心力の達しうる最遠を想像し其盡る處より尚また最遠を想像し乃至無窮の時間を要するも宇宙の無邊の邊は窮むべからずと。實に然らん。

其無限なる宇宙と同じく吾人の觀念もまた無限なり。宇宙を盡して一大觀念態なれば、其全一と關聯する處の吾人の觀念なれば、また無邊ならざるべからず。唯無明に翳せられて冥々濛々たり。一大觀念と其本質に於て連絡しながら、無明の爲に翳せら

れて冥々たるは凡夫なり。無明已に霽れて大心鏡智圓かに法界を照すものは佛陀なり

衆生は本此鏡智と致一し心光遍く法界を照すへき理性が本能的に具す。華嚴經に佛陀が自ら佛眼を開きて謂へらく、奇哉一切衆生具するに佛性をもつてす。一塵に三千の經卷を容れこれを開くときは、自然智一切智をえて、十方一切の法界萬法を照すことをうと。

また次て楞嚴經に、衆生の心靈開く時は鏡智と分に相應すべき理を示さんが爲に、佛陀は其弟子アナンの爲にかく示し玉へり。說相甚た廣し、今其意をのべば、曰く、アナンよ、汝が今外界を視るに、其向ふに在る物の象を汝之を感覺するならん。其感覺をなす所以は客觀の物の相が、彼より此に來りて、而して汝が感覺と成るものなるか、將た自己の心性が此より彼こに往て感覺をなすかとの問に對して、アナンは種々に自己の所存をのべたるも竟に當をうるものなし。佛陀はつひにアナンの爲に其伏藏を開示したりき。

アナンが佛陀世尊の慇懃なる提唱によりて、心靈の伏藏開かれて、自から觀ずるとき、盡十方の虛空無邊の刹土より乃至山河大地微塵に至るまで、悉く自己の觀念界裡の塵々たることを悟る。曰く十方の虛空汝が心內に生ずること片雲の空に點するが如し。況や世界の空に在るをや。豈能く我本然の眞心を離れんや。又云く空の大覺中に生ずること海に一漚の發るが如し。有漏微塵の國土皆空に依つて生ずる所。

解に云はく、是心とは是肉團に非ず、緣慮に非ず、竪に初後なく、橫に邊際を絕す宇宙心相本來一大觀念なれば、吾人の自觀の窓の開く處に於て相應す。

是衆生の觀念如來の一大觀念にして、鏡智と本質に於て關聯せることを證す。

予、曾て華嚴の法界觀門に由つて、一心法界三昧を修す。行住坐臥常恒に觀心止まず。或時は行くに天地萬物の一切の現象は悉く一心法界の中に隱沒し、宇宙を盡して唯一大觀念のみなるを觀ず。また一日道灌山に禪坐して文殊般若をよみ、心如虛空無所住の文に至つて、心虛空法界に周徧して、內に非す、外にあらず、中間にあらず、

法界一相の眞理を會してのち、心常に法界に一にせるは是平生の心念とはなれり。之れ即ち宗教の信仰に所謂、光明遍照中の自己なり。大圓鏡智中の自己なりと信ず。

宇宙は一大觀念の光明たることについては疑を容るに地なし。本來此一大心光中に在りながら、無明に翳せられて自己の心靈をくらまし、此大圓鏡智の光を疑ふ者を怪しむ。自己の觀念は如來の鏡智光中の連絡を疑はす。然れども吾人の法界一相觀は鏡智の分たるを信ずれども未だ佛陀に對すれは無明の雲を隔てゝ光明中にあるものと信ず。即ちガラスを隔てゝ鏡智の光明中を觀じつゝあるなり。楞嚴に明せるアナンの觀心もまた無明中にありて鏡智の光明を觀じたるに外ならず。

諸の菩薩は十信の位に於て鏡智と自己の觀念との本來一體なるを信認す。住行向地を經て初地に至つて、彌よ圓明にして、正に正覺の花開くとき、自己の觀念と本來の鏡智とは全然一致し、鏡智圓かに十方法界を照し、十方の邊を盡し、三世の際を窮め一時一念に照して遺餘あることなきを佛陀と云ふ。

大圓鏡智

吾人の寫象と世界とは客觀と主觀とは別々なるも、其本質內容に於ては吾人が寫象に相應するものなるが故に吾人は世界を寫象することを得るなり。若し客觀及び主觀の本性にして全然特殊のものならんには、いかにして吾人は之を寫象するの可能あらんや。

主觀と客觀と相ひ反對せる如くに感ずるは抑も何故なるや。

感覺的實在の世界萬物が、固濕煖動等の固體となり質碍の物と感ずる感覺的實質なるものは、一大意志即ち力の勢能にして、力が吾人の意志力とは同質にして、之に觸るゝが故に吾人が之を固體また熱また濕等と感覺するなり。

本質は觀念態に物象として理性的の故に規律的に產出し活動せるものを、人之を客

觀界の物質と感ずるなり。物質と感ずる寫象態にありて物質の重力及び熱また固形體等と觸感するものは意志即ち力の能なり。

色聲香味等の物象と感ずるものは、絶對寫象より、客觀の實態として、一大意力によりて發動せり。この理性的規則即ち天則秩序に時間的空間的因果律的なるは實體が理性態なればなり。

萬物の物象は、客觀の觀念態より發動し、意志力の萬物に秩序整然たるは、理性の故に、實體の相用の三大よく萬物を現出す。

宇宙は一大精神にして、相大と用大の屬性あるは、例へば宇宙を塑摸せる人の精神に寫象意志がありて、表相あり活動するが如し。

若し實體に三大の性能なからんか、焉に依つて斯の表相と亦た斯の如き活動をなさしむるものぞ。

若し能觀の心と所觀の世界とが其本質全く異なるものならば、吾人は如何にして之

が寫象を可能ならしむるか。是れ奇怪ならずや。

然れ共全く其の本質の相は觀念態にして、其能力により之が天則規律に隨つて客觀的觀念即ち物體と實現したるものなるが故に、人の主觀的觀念が之を寫象し、また再現することを得るなり。其本質同一なればなり。

本質に於ては一體なりとて、客觀の實在と主觀の心質とは現象に於ては反對に現じたるを以て、一なりと云ふべからず。相待的にまた能觀所觀異なればなり。

物體は力に實現せられたる客觀々念なればとて、本質に於て一致せることは拒むべからず。

佛教で色卽是空、空卽是色とは是れなり。空とは心質にして色とは物質なり。物質と心質とは其本質にては相卽して異るものに非らざるなり。

絕對無碍觀

如何にして無碍を觀ぜん。世界あるも亦た無碍なり。自ら觀念せよ。物質を通じて

觀念は無礙ならずや。

物心不二觀

主觀の心象と客觀の物象とは、本同一絶對觀念界の故に、主觀は能く客觀を寫象し再現し得。全く本質にして相ひ乖違するならば認識を可能ならしめざるべし。自ら之を實驗するに甚だ然らざるべからざるを信ず。然るに何故に主觀客觀は同一の本質が相ひ反對せる二現象となるや。答て。能觀の心と所觀の物質とは、本と一體を兩方面より見たるものなりと云ふ事を得べし。如何にとなれば、物體は外面より之を認識する事を得るも、主觀は自ら觀ずる外に之を識る由なし。然れば自己の內面は心にして外面は物質なり。他の內面は之を意識するに由なきも、理に於て一致すべき必然の規律あれば、他も自己と同じく內面は精神なり。此理はすべての有機物を以て現存にまで推理する事を得。故に一切の外觀は物質にして內面は心靈なりとすれば、能觀と所觀と現存と意識とは同一の本質にして、內面の動機、外面の因果と現はるゝ同一の活

動を、二面より見たるに外ならず。

主觀と客觀とは同一の絶對觀念態の內外二面の現象なりとせざるべからず。

故に主觀客觀は相待的規定の人間の方面より見たるものにして、本來一大觀念たる物心不二なり。

之を色即是空空即是色と云ふ。物質が內觀すれば觀念にして、觀念を外觀すれば客觀なり。故に同一觀念態の內外二面なり。此の統一を絶對觀念態と云ふ。故に全宇宙は全體客觀物體なると共に、全體觀念界なり。

第三色心無碍觀

主觀界と客觀界とは同一體の內外二面なるは既に識りぬ。若し本質が全く觀念態なれば、客觀と共に如何にして絶對觀念界たることを識らん。答て、若し世界の本質が觀念態にあらずして本質と物質とは相背致し氷炭相ひ容れざる如きならば、實在にありながら絶對觀念を觀ずる事を得ざらん。絶對無碍觀をなす能はず。嚮きに言ひし如

く世界は力によりて現はれたる客觀々念なるが故に、絶對觀念と一體にして無碍なるを得ん。自ら觀ぜよ、人は肉眼を以ては、壁塔を隔てゝ觀ずること能はざるも心眼を以て觀ずれば地球を徹し物體貫きて無碍なり。宇宙は絶對にして一體の觀あり。若し客觀と主觀とは同一の觀念態なるが故に無碍なるを得べし。然るに自己の肉眼と外界の質碍の壁とは、力によりて暫く觀念を碍るれども、觀念の本質には同一のものにして、相ひ障碍せざるものなる故に交渉無碍なり。

力によりて實現したるものは、空間に時間にすべて相待に規定せられ、觀念態は無碍なると共に絶對なり。すべての爲に規定せられず。自ら觀せよ觀念は外物の爲めに束縛せられず、空間を通じ時間を徹し一切の物質を貫きて無碍なり。

絶對無碍の觀念態は即ち如來大圓鏡智なり。

物的實在の世界は力によりて現はるゝ客觀々念にして、一切の個々の心は、絶對觀念たる主客の各一部分なり。宇宙の現象界は其時に現れたる一大意志の統一的全體な

り。

絶對觀念の全體として永恆本然自性天眞なるは如來なり。

如來の本質は一大觀念態にて絶對無碍なり。一切の相待規定を離れて永恆常然、純粹無雜、圓融無碍本質の吾人が現象界と見る一方面に、全現象面には、盡空間盡時間無量の萬物が起伏隱顯究りなく、相待に規定せられ、變化極りなきものは、一大觀念界の微塵の如く、いかに絶對意志の勢力に吹き起さるゝ微塵の世界は轉變極りなく(現)ずるも、如來主觀本質の內面には永恒常然にして無碍なり。

世界は認識界

如來絶對觀念中の宇宙現象界なれば、宇宙無盡の一微塵にすぎざる吾人が世界、及び吾人は、全く絶對意志に實現せられたる客觀々念界なれば、之を離れては世界客觀界も主觀界も有ることなし。吾人が客觀の萬物森然たるものと、之に對する個人の能

觀の心とは、何れも同一の觀念態にして、兩面に現はれたるものとは信じぬ。

然れ共吾人が規定せられたる意識が、全く如來の本質と全然同じからざるものは、衆生は相待に規定せらる相待規定即ち因果律に支配せらる。自然律と主理機制との爲めに着色せられて實質と相應せず。

三大によりて現に實現せる宇宙現象は、本體が理性的規律により產出する大勢力は本然として無始已來休止あることなく、遍空間に微塵の如くに散在し、遍時間に千遷萬變究りなく、世界無量萬差の相を呈し、世界には成住壞空、生物には生住異滅とて生ずれば滅し、滅すれば生じて、本體無限の故に休止なく、勢力無限の故に轉變極なき世界より、外觀すれば因果にして、內面よりは勢力なり。

阿賴耶識

如來の絕對觀念の本質は、自然規定たる世界の衆生には意識すること能はず。自然

に規定せられ因果に支配せらるゝものは、如來の觀念態の或る一方を認識す。自然規定の個體觀念を唯識論には阿賴耶識と名づく。唯識論に、一切の有情無始已來法爾として八の識あり。中に於て第八の阿賴耶識是れ根本たり。頓に身心器界種子を變轉して、第七識を生ず。皆な能く自分の所緣を變現して都て實法なしと。

自己が認識する現象界は種々雜多なるも、唯識に本づくに、外に實境なし。唯だ內識にあり。外境に似て生ず。現象界は唯識に包含せる種子より開發したるに外ならず

第八識は所執藏と云ふて一切の種子を含藏して種々の現象を開發す。また第七識より藏識に種子を與ふる故に所藏と云ふ。藏識に有する種子を開きて七識となり、其が後また藏識を薰ず。

本有と新薰。本有とは本より有る種子、新薰とは外より與えられたる種子なり。本有は人の伏能にて、新薰は經驗より來る。之を無始の本有無始の新薰と云ふ。そこで種子現行を生じ現行種子を薰ず。

唯識四分とは、相分、見分、自證分、證自證分にて、相分は客觀現象、見分は相分を認むるもの、自證分は見分を認むるもの、證自證分は證分を認むるものなり。

唯識には共變不共變とて、吾人が外界を見るに、他と共に變ずるものと、不共變との二あり。兩人が或一物を見て共に相合ふは共變にて、相合はぬが不共變なり。

要するに唯識に各個人々々の唯心にて萬法を現象する相待的唯心論なり。

現象世界無數の萬物種々變轉無窮なるも、其が根本は唯心の所變なり。相分とは客觀の森羅萬象の自己の心が外界に現はれたる、見分は外界の物を見る、影像を見るものが見分にして、影像が相分なり。自證分は見分の作用を證明するものなり。

六識の對境たる色聲等なるものは阿賴耶の相分なり。

唯識の阿賴耶識轉依すれば大圓鏡智となると。

今曰く、阿賴耶識とは佛教の因果規定と生理機制による絶對觀念態なり。本體は本來絶對なれども、生理機制の爲めに着色せられて、各自が認識世界を殊にす。

吾人々類が認識する所の世界は、何の方面より觀じても人間の世界にして、日月は明く照し、感覺作用乃至主觀と共に客觀に於ても、見聞覺知として、すべての身心の生活に於て享受する處、人間世界ならざるはなし。

若し吾人が生理機制を以てせば、よしや十萬億土の彼岸なる星界に到達することを得るとしても、吾人が生理機制に於て認識することは人間世界を超ゆるものに非るべし。

阿賴耶を業識と名づく所以は、一切生物は各其業の差別に依つて、業より成立したる精神は因果に規定せられ、種々の異生身を受く。其各種々の生物類は受くる所の身心性格によりて、其の享受する世界も隨て生理機制と身心性格によりて受感性を異にし、隨て認識も亦た同じからざるべし。之を唯識論には業識所感と名づく。論に一水四見の說あり。曰く同一の水に對する感覺が人類は之を水と見る。天人は瑠璃寶地と感見し。餓鬼の爲めには近づくべからざる熱河と感じ、水族には恰も人類が空氣に對

するが如きの感なりと。

進化説によれば、人類と人類よりは下等の動物にても、生物進化の階級によりて、すべての生活機能等に、數等の差別ある爲めに受感性を異にす。

階級によりて內面等の生活形式の相ひ類するにも拘らず、受感性の異るため世界に對する觀念相ひ同じからざるべし。最劣等の生物の如きに至ては本能的に營養生殖を營むの外世界何物ともなき盲目的生活なる事は推理するに易すかるべし。

また例へば吾人が青眼鏡を以て外界を見る時は萬物悉く青色を呈ずるが如く、人類に於ては或は共同的に感覺するあり。また個人々々が特別に認識するあり。何れにしても吾人は自然律に規定せられたる生理的機能は感覺及び認識は相待規定によりて、本來絕對觀念態を吾人が機能の爲めに制限せられて世界を感じ認識するものなるは疑ひなし。

物と心

宇宙萬象は本絶對觀念態より主觀客觀の二象は現じたるものとす。客觀的觀念を物象と名づけ主觀的觀念を心象と名づく。もと一大觀念態が意志の力によりて實現せられたる客觀々念態を現象宇宙と云ふ。

萬物の固形即ち質碍なるものは、此力が地水火風の堅濕煖動の質は即ち力なり。力とは意志なり。觀念の力によりて實現せるものが物質の現象となるを云ふ。若し本質と意志の力のみならば、物質には盲動にして象相なく、色もなく聲もなき、天に太陽なきが如く、物的盲動のみにして、花も色なく、宇宙萬象なく、唯物體動と分子動のみの盲動ならん。絶對觀念態ありて天に太陽の照す如く、萬物が心象を現はし、物と心との二現象が種々の象相をなすは、觀念態の實現する所なり。同一の觀念態が物象と心象との二方面に現はれたりとす。是の絶對觀念態を大圓鏡智と名づく。大圓とは

宇宙全體が同一觀念態なり。觀念態を鏡に例ふ。鏡とは相待的の甲の鏡に乙の物象を映現するが如くに非ず。宇宙全體が即ち觀念態なり。一切森然たる物と心との二象は即ち觀念態の力によりて實現せられたる影像なり。故に今宇宙の萬象が即ち宇宙てふ觀念鏡の影像に外ならず。力によりて現はるゝ萬象は新陳代謝して無始より已來種々に轉變するも、其の內容は同一の觀念態なり。森羅萬象、若しは客觀物象、若しは主觀の衆生の心象、內觀も外觀も同一觀念の兩方面に顯現したるものなり。この全體を統一して惣體なるは即ち大圓鏡智、即ち絕對觀念態なり。

唯識論の大圓智

唯識論には、大圓智とは第八阿賴耶識の開發して大圓智に轉依す。賴耶識に見分と相分と自證分とありて、頓に根身器界を變現すと。客觀として見らるゝ相も、主觀として物を知見する心も、其本は同一の藏識が世界と身體と精神として變現したるに外

ならず。天然の意識には主我を中心として內外を立るが故に、本體を藏識と名づく。身心器界ともに相待に規定せられたり。然るに唯識觀に入つて、自己の心靈開發して自觀が一大觀念と一致して、自己の心靈として、一大心靈態を離れて主我てふ特殊の理體あるに非ず。自己が本體は、一大心靈態を諦かに體觀したる時、主我中心を轉じて絕對心靈の一員たる自己なり。轉依したるを大圓智と云ふ。

今は大圓鏡智、即ち絕對觀念が主觀客觀の萬象を現じたるものなれば、然るに天然的意識は未だ其眞相を意識せざるが故に、假りに天然意識が客觀と意識との本なる心を藏識と名づけたるものなり。自己及び世界萬物は全く絕對觀念が物と心との二象と現じたるに外ならずと知る時は、賴耶識の轉依と名づく。

然るに絕對觀念なるも、天則秩序の理として現はれたる方面と、終局歸趣の理性としてのとは、圓智には別なきも、之に對する意識には其相象異れり。

絕大なる宇宙の現象より觀れば、天體無窮の星宿より萬象相待的に因緣規定して空

間に充塞して邊際なし。また時間的には因果關聯して三際に徹して盡くることなし。此の相待規定なるものは相互の關係を離れて獨特孤立の物あることなし。外觀すれば物質的の萬物が因果に支配されたる現象界を見る外なし。然れ共宇宙は一大觀念の所現にして、外面は物質のみなれども內面より自觀すれば觀念態なりと言はざるべからず。故に外より見れば因果的なるも、內面より云はゞ絕對觀念が心靈の力によりて發現せられたるものとす。宇宙現象は觀念態の現象なることを知るべし。

圓智本絕對觀念

絕對觀念態は本唯一にして一切萬象を包括し一切の複雜なる物を開展し即ち主觀客觀界と顯現せる差別の萬象なり。すべての萬物は差別なるも圓智によりて統一し、絕對觀念には過古も未來も現在も顯動的觀念の內面に存在して、外觀には常に現在のみなり。內容より發現するが故に三世を當念に收む。常然現在の同時態なり。但に同時

態のみに非ず、意識的感覺的形式を脱して直觀的なり。觀念が即現實にして現實が即觀念なり。華嚴に念劫融即と云ふ。また客觀的にも、發現の現象の萬物には、十方微塵の刹土として距離あるも、絶對の自觀態には絶對自己の中にして、遠近及び大小の相あることなし。また差別の相あこるとなし。

起信論に、眞如自體相に大智慧光明の義とは即ち圓智なり。本來絶對觀念態なるも妄心覺らずして諸の境界を見ると。圓智は恒沙功德の相を具すれども、而も差別の相なしと云ふは、發現せられたる萬物には萬差の相を呈するも、能發の智態は唯一觀念態にして、而も差別の相なしとなり。空間に絶し時間に絶して而も空間時間に徧する唯一の觀念態なるが故に圓智を全一と云ふ。

（一　大自觀）

吾人は圓智と繫れることを觀せんには、肉眼によらずして心眼を以て觀ずる時は、絶對唯一の觀念態なるを識らん。外面を見れば客觀界複雜なる世界萬有を有し無量不可說の浪をなすも、內面不可割に統一せらる。空間無窮に因緣關聯せる因陀羅網の如き世界萬類も、同一觀念の客觀現象なるが故に、觀念に一貫せらる。

信論に一切の法は唯心、實には念なし、妄念覺らずして念を起して諸の境界を見るが故に說いて無明となす。心性不起、即ち大智慧光明の義、本來絶對觀念態は唯一なりしが、局部觀念たる妄念が即ち數多に分類せるは大海の波の如くにて、宇宙に萬象無數なれども一の觀念態の波に外ならざるなり。物象と心象とは同一觀念態の兩面に現はれたるなるも、所現の物と心との多數に拘はらず同一の圓智なり。故に內に非ず外に非ず、中間に非ず、主觀として現ずるも客觀として現ずるも同一の觀念態なり。

故に外觀の一切は內觀の一に統べられ、天則理性の自己の觀念を開展する時は、一大觀念と合一す。人は天然意識には主我中心にして、差別の中の一部を以て基礎として自己は特別の自己として、世界を實體として依屬すべきものとす。然るに人の自觀が開展して絕對なる一大觀念と合する時は、十方洞然として碍りなく、自觀と大自觀と同一にして二相なし。能觀と所觀と不二なり。空間に徧し時間に徧し、當念が三世に交徹し、十方を盡して當處に收む。表面の個人格を失はずして絕對觀念と一致す。

曾て此身が依屬し來りし世界は無數位を盡して一大觀念の一局部に過ぎざるなり。無數の世界が却て無限の觀念態に依止せざるものなし。自觀的位置を轉じて我の方面に坐せずして、一大觀念態が即ち自己の根底として觀ずる時は、無數の世界は悉く自觀の中の微塵の如き觀あり。全く此觀念態に安立する時は、相待規定を離れて、生滅變易なく、絕對根底を得たり。大安心の地を體達すと云ふべし。

楞嚴に一切衆生無始より已來己に迷つて物となす。本心を失て物の爲めに轉せらる

故に此の中に於て大を觀小を觀る。若し能く物を轉ずれば即ち如來に同じ。身心圓明にして道場を動かず、一毛端に於て徧く能く十方の國土を含受すと。

意は、物と心、即ち世界も心も、是れ自觀力の所現。盡天盡地は是れ自己と。自觀之に迷て外の物となす。自己の觀念外の物なるや、外物の爲めに轉ぜられ大とかまた小とかを分別す。大も自觀小も自觀內にして、自觀は即大自觀と合一にして、本より絕對なれば、更に大となすべきなし。また小相となるべきなし。大自觀を體達して見よ。一切の物は自觀の所現なるに非ずや。物を轉ずれば如來に同じとは、自觀と大自觀とは分つ事能はざるなり。

自觀態は本來分別あることなく、方偶有ることなく、割裂すべからず、分配すべからず。故に一毛端を擧れば(　　)一毛を大觀念と分配すること能はざればなり。吾人が腦灰白質に三千世界を收むることを得るなり。圓智に繫るが故なり。

楞嚴に阿難等が如來の微妙の開示を蒙り身心蕩然として罣碍なきことを得たり。是

の諸大衆各自ら心が十方に徧ずることを知りて、十方の空を見ること手中所持の葉物を見るが如し。一切世間諸の所有物は皆即ち大自觀中にして、徧圓にして十方を含裏す。反て父母所生の身を觀ずれば、猶ほ彼の十方虛空の中に一微塵を吹くが如く、存するが如く亡ずるが如く、湛然たる巨海に流るる一浮漚の現滅從ふことなきが如し。了然として自ら知る、本妙心の常住不滅なることを。

客觀の物象と見しものも主觀も同一の觀念が二面に實現したるものとなす。

曾て依屬し來りし世界は相待生滅にして、世界に依止したる自己意識は今は一大觀念の中の世界にして、世界却て觀念界の一員たるの觀あり。自己の自觀的位置を轉じて、個人の方面に坐せずして、一大觀念態を自己の根據として觀念する時は、天體無數の世界は悉く自觀の中の微塵の如きの觀あり。一切個々天然相待の生滅規定の根底を解脫して、絕對的根底に依屬すべき理を自觀せしむる觀なり。

自觀は一大自觀と合一するが故に之を分割すべからず。吾人の觀念は區劃すること

能はず。

一切卽一切觀……事々無礙法界觀

客觀界の物象と主觀界の心象は一切無量の數、無量にして數ふべからず。かゝる萬象は本と同一觀念の異現象なれば、內面に不可割の統一的原流に繫れるが故に、一を擧れば、一切を收むる一大觀念に依て統一せらる。擧一全收、一を擧ぐれば一切の世を攝す。橫に空間には因緣規定して因陀羅網の如く、竪に時間に徧して次第相續して鎖の如くに繫れるもの、一として絕對心靈に統攝せられざるものなし。

一念に無量劫を收め、一微塵に一切世界を攝すとは、是れ空想に非ず、絕對觀念態即ち神智の理性として、是れ拒むべからざるものなり。自觀せよ。自己の觀念は東方に向て思想に思想を積ねて數多の時間を費すも、所觀の觀念界も盡るに非ず。能觀の觀も盡すべからず。吾人は觀念的寫象の範圍を碍ぐること能はず。絕對無限の觀にし

て區劃を限ること能はず。是の絶對觀念の一員たる資格は何人も之を制止すること能はず。

吾人の腦髓分子に互る觀念態と、一切の世界微塵に流るゝ所の一切の萬物とは不可割の關係をなす。吾人は微塵の世界及び萬象を意識すること能はざるも、觀念內に攝することは可能なり。

一切萬有には理性に統らるゝ故に、事々無碍論起る。吾人の觀念は一大觀念に繫れるが故に、微なる腦髓分子に、十方微塵の刹土を觀念す。吾人の眼瞳に空間無數の星宿を感覺す。人の如き意識を有する物にのみ限らんや。眼鏡にまた映現す。物象と物象と相映し、心と心と相映し、物心相現す。之れ物理心理の能く知る所なり。かゝる妙用をなさしむるものは是れ圓智なり。

華嚴經に、華藏世界所有の塵、一々塵中佛皆入。又曰く一毛端中無量刹、各有四州四大海、妙高鐵圍亦復然、悉現其中無迫隘と。一切萬物相互に交涉す。人は常に之を

經驗するも是れ何なる理性に依て此の妙用を結ばしむるやを考へず。單に物質自然律なりと。實に宇宙間に淸淨本然として周遍せる靈妙不思議の理なしと思はるべけんや。之れ絶對觀念即ち大圓鏡智の表現する所なり。

有る人の分子論は一々分子に一切の分子を包含する理を究むるも、一切即一の理を言はず。本質と表相とを明かにせず。本質が直に一切に一切を攝すとは理あるのみ。心性に智態寫象態の一切に一切を攝すと言ふは、疑ふべからず。

圓智即ち觀念態を四種の觀門に依て說明せり。

第一は圓智は絶對觀念態にして一切の主觀客觀即ち物心二象の統一的觀念態なるを明かし。第二は所現の象相は、物心二象無量差別の呈相をなして、相互に相待的に規定せられて相ひ寫象すべき天則なるを明し、第三觀に物心二象は本同一觀念が無量の個象なるも內面不可割に統一せらるゝが故に各自は根底の自……(斷絶)

大圓鏡智

宇宙精神の象相は絶對觀念なりとす。

宇宙現象は吾人の寫象なり。然れども客觀界には吾人の主觀觀念に對して、過境的世界は實在にして內容は能觀と所觀と相應せる本質なりとすべし。

所觀の世界實在に質碍の堅固濕熱動等の實在なるは實は力の投合による。觸れて固體と感ずる外界は因果的運動が規律的に活動す。之を物質と感ずるは意志の勢能なり客觀の表象なるものは客觀々念にして、質碍と感ずるものは意志の力による。絶對觀念が力によりて實現せられたる客觀々念を客觀界と感じ、佗面を主觀とす。其實は根底は同一觀念の兩現象とす。

然るを素朴なる實在論者の如く、世界は絶對的に物質實在にして、自己の主觀とは

全く本質異るものならば、いかにして吾人の觀念的寫象を可能とせん。全く本質は同一の觀念なれども世界の方面、意志力が論理的に規律に隨つて實現したる客觀々念なるが故に、同一の觀念態を兩面に現じたるなり。しかれば同一の觀念を主觀客觀の兩面現なればとて、觀念論者の主張する如く、客觀は觀念なりと斷ずべからず、客觀なるものは不斷に秩序的に意志力によりて運動し變化し因果律に現ず。それを所觀の觀念質を主觀に着色して顯象す。客觀世界は論理的に意志力に逼出さるゝ寫象の實質とし、すべての個體は其一員なり。カントが客觀は主觀（　）吾人認識の境にして、實在は超絶界なるを以て吾人の認識は實在の眞相を知るものにあらず、自己の主觀の現象を知るのみと。唯識の見分相分共に同一のアラヤ識なりとの唯心說と共に、人の精神と宇宙實在即ち如來の一大精神とは超絶なりとす。

今は然らず。絶對觀念即ち如來の鏡智を根底とするにあらざれば吾人の主客兩觀と成るべき原理あることなし。

絶對觀念が意志に實現されたる特殊的なるものは個々にして、宇宙萬象は絶對意志の統一的總體にして、全一の絶對觀念の主體にして、永恒本然なるは如來の大圓鏡智なり。

大とは宇宙に全一、圓は絶對、鏡とは譬喩、宇宙一切森然たる萬象は意志に實現せられたる客觀的の方面を吾人が認識する處の宇宙とす。是一大觀念態に顯現したる影像のみ。是華嚴法界觀、會色歸空觀に相當す。

色心不二觀、主觀客觀本同一本質

主觀の心象と客觀の物質とは、現象に於ては物質と心象と全く異る如き觀あれども、其根底に於ては一致せざるべからず。是致一論者の説の如く、物心二界は同一本體を內外二面より見たるものと言ふことを得べし。自身が外面より觀ずれば全體物質ならざるはなし。內觀する時は全體一の觀念體のみ。自己の實驗は之を一切の人類に推論

することを得べし。自己外面は物質にして內面は精神なること、之を一層擴げてすべての植物に及ぼし乃至無機物に通じて推論し、地球及太陽系にいたり、外觀は物體なるも內觀は不識精神即觀念態なることを推すべし。

致一哲學。內界外界致一、現象には異るも根底には致一し、形而上學は現存と意識の本質同一を論ず。二面を包括せる宇宙一體の一大觀念態に達すべし。致一の理は宇宙全體に通じて一大觀念を客觀主觀の兩面より觀じたるに外ならず。主觀客觀は論理によりて裁判せられしも根本的一致なり。現存の內容は觀念的にして、實現の方面は意志の活動なり。外界には因果的に現ずるは、內面の動機として理性の秩序として。

二者同一觀念態を兩面より觀ずるが故に本質不二なりと云ふも、現象の異ることは忘るべからず。

宇宙は內觀は一大觀念態なり。宇宙一大觀念が、內容の理性によりて、意志によりて發動すれば秩序となり、因果律に關係を以て萬有を顯現す。

一切の個體はこの根底を自己の精神とせざるなし。自ら觀せよ自觀と一大觀念とは連絡して全く宇宙と一體なり。一切の個々は悉く如來大圓鏡智の一員ならざるはなし。

物心無碍觀

物質なる客觀界の質碍なると心質なる主觀界とは互に相背致し氷炭相容れざるものと云ふべからず。此二界の本質は本同一にして意志力實現の質碍なると唯觀念の本質なるとにして、同一の觀念態なるものと云ふことをうべし。もし二質が全然相異る本質なりとせば、物的實在にありながら無碍なること能はざるべし。

然るに吾人は自から冥想觀念する時は、廣延質碍の存在物あるに拘はらず、一切萬物を貫徹して世界一體觀念に達するに非ずや。不識的觀念は地球及び一切萬物を通じて絶對にしていかなるものも碍障することなき宇宙は一體無碍觀ならずや。

絶對無碍の一大觀念界には一切の相待規定を絶し、森然たる萬象、擾々たる萬物は

大圓鏡面に影現せる影像のみ。一面に影像現ずるにも拘らず、觀念の本質は無碍なり。力によりて現はれたる因果的物材と意識的心象とは相待に約束せられて罣碍なるも觀念的本質は一切を通じて無碍なり。時間空間と物體とを貫通して虛徹靈明一體無碍なり。故に物心無碍觀と云ふ。

超絶無寄

物心無碍觀は宇宙主觀客觀兩界は本同一本質にして、意力に現じたる物體を通じて同一觀念態なれば、吾人の觀念は一切を貫通して無碍の觀を可能にすることを說く。

尙進んで超絶無寄觀とは、吾人は元相待的規定せられたる生理機能のために主觀客觀兩面に見るも、宇宙本然自性の本質の相は主觀客觀もなく、本來絶對無碍の一大觀念態なり。吾人は最深の觀念に入て宇宙の本質と一致するときは、超絶無寄、絶對觀念、非內、非外、非中間、一切相待を超越し言語道斷心行所滅、若し强いて表明せば

絶對觀念態のみと云ふべし。

吾人はここに於て如來の絶對觀念を本質と一致したるものと信ず。如來の本質內容にはいかに無盡の性德を含藏せりやは吾人の爲に過境的なるも、超絶無寄觀は吾人は少くも如來の一大觀念が吾人の心窓開くかぎりに於て一致したるものと信ず。

宇宙實在の本質の相象は一大觀念態にして、宇宙現象の主觀客觀は全一の力によりての實現にして、吾人は其時に實現する觀念の特殊的實在にして、宇宙現象界は其時に顯現せる絶對意志の統一的總體なり。全觀念の本體として永恒本然なるは如來大圓鏡智なり。

如來の鏡智といふも絶對觀念といふも、同じく如來心靈態の相の方面より見たるものなり。

鏡智と契合

天然素朴の人は一大觀念の大空の中に立つて、生理機能の腦及神經を藉りて主觀及客觀として認識す。若し冥想觀念の極に洞然として本然の一大觀念態と一致する時は、宇宙一體觀にして本然大圓鏡智と相應す。非內、非外、非中間、一切相待の約束を超絕して絕對同時態なり。

楞嚴經に阿難陀が敎主佛陀の爲に自己の伏藏を開示せられしとき、盡十方の虛空より無邊の刹土より乃至山河大地微塵に至るまで悉く自己の觀念內なることを觀ず。

十方の虛空汝が心內に生すること、片雲空に點ずるが如し。況や世界の空に在るをや。豈能我本然眞心を離れんや。又云く、空の大覺中に生すること海の一漚發するが如し。有漏微塵國土皆空に依つて所生。

是肉團に非ず緣(影)に非ず、竪に初後なく橫に邊涯を絕す。

十方虛空微塵國土元我一心中所現物、我昏迷倒惑すと雖とも苟も一念心を回らせば本然の一大觀念に相應す。

宇宙心靈本來一大觀念にして吾人の觀念の窓開く處に於て全然一致す。斯の如きの一大眞心はアラヤにあらず、自己に在らず、本然の觀念に自己契合したるものとす。

鏡智の相

現象世界萬象は絶對意志によりて顯現せられたる客觀々念。觀念は本一にして主客兩觀を包括す。內容の無盡の性德より因果律的に一切を開展す。宇宙全一の觀念に內性より意志に實現せられたる局部は即ち有機世界の個體なり。大圓鏡は永恒に全一にして而て同時に多數を開展す。一面には時間に過去未來とし空間に微塵の刹土及一切の心象と現ずるも、本然の鏡智の方より見れば絶對同時態過去未來の差別なし。

鏡智と云も個人的の心に相待的に寫象するに非ず。絶對の觀念に自發的に實現せるが影像なり。圓智は局部を有せず。絶對觀念は自己の意志內容自發的の中に一物なく、圓智の影像は自發的實現なり。

圓智は絶對同時のみならず、感覺形式を超えて直觀觀念態は象相にして、全體の內性は平等性智にして、即ち理性の故に、論理的規律に秩序的に變作す。故に圓智の內容は理性的なり。

同一の一大心靈態の本質を觀念態として即ち圓智と名づけ、內性を理性とし即ち性智とす。同一の心靈を相と性との二面より見たるものなり。

認　識

鏡智とは認識の根底なり。謂く吾人が現に認識する認識の本質と認識の主觀との本體を求むるにあり。認識の研究には古來實在的經驗論、實在的唯理論、觀念的經驗論、觀念的唯理論等あり。

今暫く實在論と觀念論との說を明さば、實在論によれば、現在目擊する處の認識は實在の精確なる模寫なり。吾人の寫象は客觀事物の本質眞相を實に完全に示すものな

りと。次に觀念論者は曰く、寫象と事物と即ち思想と實在とは全然相容れざる異れるものなり。曰く吾人の認識は客觀の事物を有りのまゝに寫象す。外界には吾人の主觀を離れて、運動の物體に質碍の性たる色聲等の諸の性質を備へたるものありて、吾人の感覺は之が實相を寫象す、ここに於て認識す。

實在論には難點伴へり。實在を離れて認識の本質なしとせば、夢幻錯覺及び熱病者の所見の如きは物質實在なきに感覺あるは不審し。

次に概念思考によりて認識する數學の理の如き感覺によらず思考によりて認識す。

又生理學によるも、例へば皮膚を刺して痛を感ずるは實在論によれば其痛感は鍼にありと云ふべし。然れども其實痛を感ずるは鍼にあらずして人の皮膚にあり。其他色あり聲ありと雖も人の眼耳なくんば之を感覺すること能はず、物質の刺激は機能を刺激する力の性質にして、感覺し知覺するは人の主觀にあり。

之に由つて觀れば素朴の實在論は破れざるを得ざるべし。曰く物體は廣延質碍の性

を有す、感覺を惹起すべき力を具ふるも、全く可感的性質は實在の表明のみと。

次に進みて第一性と第二性との區別をなし、第一は主觀を離れたる物體、廣延碍竄可割運動の四性なるもの、第二性とは唯人の感覺に存在せる色聲香味等。すべて物體は吾人の意識を離れて存在し、感覺は物體の運動によりて惹起するものとす。次に進みては第一性質と雖も第二性質と同じく知覺を本とす。主觀の感性なかりせば廣延も固體も認識すること能はず。

第一質知覺に於て受動的にあらず。自己に活動によりて感覺す。物質の緣によりて內部に於て自己が知覺を惹起す。すべて廣延等の性質は色と同じく主觀によりて認識すと。

絕對的觀念論によらば、吾人が認識は自然界に存す。時間空間因果性等は決して過境的實在其物に屬するにあらず。主觀の產物なり。自己の精神的形式が客觀化して之を見るのみ。また時間空間上の性質を規定する數理學の諸法則の如き、相待必然の關

係の如き、普遍的法則の如き、客觀其物に存する者といふべからず。主觀の產物なる思考の形式なり。吾人が認識の自然界たらしむるものは主觀にあり。自己の精神を客觀として認識するのみ。吾人の悟性にも感性にも實在の本體をば決して認むべきものに非ず。是を絕對的觀念論とす。內界外界に吾人が認識する萬象は皆現象にして、實在の實相にはあらず。眞相は過境的なりと。

佛敎の唯識論の立脚地は絕對觀念論と同じく、主觀の內界と客觀の萬象とは、同一の心識を、見分相分として、兩面に現じたるものにして、別なるものにあらず。而して人の主觀客觀の本質は、眞如の實體とは全然超然的にして、主觀と客觀と共に眞如と一致すべきものに非ずとして、實體の本質と現象の萬物とは超絕的なりとす。之を超然的觀念論とす。これらの說によれば吾人の認識及び主觀客觀の根底をすべて個人に歸するのみ。こは眞理の終局にあらず。階級に屬す。次に吾人の認識もまた吾人の觀念なり。本質根底を求むるに、圓滿なる大乘敎により、また唯心論者のと同じく、

實體と現象とは本同一本質にして、實體を離れたる現象なく、現象即實在論なり、汎心論なり。超然論者の所執は絶對神論即汎心論と撞着す。

吾人は認識の根底を絶對觀念即ち如來の大圓鏡智に求む。若しは主觀若しは客觀、すべての現象の根底は即實體なり。

例へば精神の本體と活動、即ち知力感情意志等を統一する本體即ち精神なり。すべての活動の體を除き去らば遺る處何物ぞ。また人の四肢五臓六腑一々取り去る時は何物か是身體なる。吾人の心情意志として活動するもの即ち精神の本體なり。

吾人の認識は一大心靈の一大觀念を離れて吾人の觀念なるもの存在すべきことなし故に吾人の觀念は一大觀念と一致するものとす。

吾人の觀念は一大觀念を根底とす。

吾人の認識の本質と自己の認識との根底は宇宙實體の象相たる一大觀念なりとす。實體は自己の根底なるが故に、自己の精神と同一本質なれば、實相を直觀することを

得るものと信ず。吾人は實相を知るといふも生理の器械の爲に障ぎられて完全には認め得ざるも、本質に於ては致一すべきものと信ず。一大觀念と一致すと云ふよりは寧ろ一大觀念が吾人の心窓に顯現したる大觀念の光明の射映なるものと信ず。

吾人の觀念なるものは例へば日中に太陽の光線の入る一室の窓を開きたるが如し、觀念の本質は中に非ず、外に非ず、中間にあらず、絶對觀念の映じたるものを吾人の觀念とす。主觀と客觀とは本絶對觀念、意志に實現せられたる一面を客觀と現し、他を主觀と現す。而して吾人は機制的の眼官を以て一面を客觀と名づけ間接にまた直觀的に一面を主觀と名つく。同一本質にして絶對なるは大圓鏡智なり。これによりて吾人が認識の根底とす。

本體の眞空と現象の萬物との關係

法界觀門に眞空と妙色、即ち本質と現象とは、本一體の二面なることを明しぬ。今

其意に準じて本質と現象との分別また致一の理を明さん。此に四觀あり。

一、會色歸空觀

色とは堅煖潤動の如き物體また感覺感情知力意志等の心質をも包ぬ。人の認識なるものは本質は眞空の一理に歸す。即ち一大心靈が觀念と意志とによりて現ずるものとす。物の動力とは人の意志と同體にして意志の動力は物體の力なり、(客觀的の力が)人が物の活動を實物と感ずるは人の意志性格によりて存す。人の主觀が客觀の象相を知ることを得るは、其理性律によるも觀念內容に存す。若し客觀界なるものが人の觀念內容と同質にあらざる物體的のみならば、いかゞして我が觀念はこれを寫象することを得べき。故に知る、其の實質は觀念態にして意志によりて規律に隨て實現せる物體なりと。若し然らざれば、我が觀念にいかゞして再現することを得ん。斯る理あるが故に色卽ち物體なるものは本質は眞空の心靈に歸せざるべからず。故にすべて客觀

物も主觀の心も本一大心靈の發現なりと云ふべし。

然るに、正理を知らざる外道及び二乘等が諸の見解をおこして眞理を失ふものの如く、萬物の眞理は斷空にして眞體あることなしと斷定すべからず。亦唯心論者の如く、主觀と客觀とは同一理なればとて實在世界は單に唯心なり客觀界は單に觀念なりと斷ずべからず。さればとて唯物論者の主張するが如く全く世界は唯物なりと斷定すべからず。若し第一の說の如くならば斷空に陷りて眞空妙有の理にくらく、また無より有を生ずとなるべし。第二の論によれば唯心の一片のみに偏執して未だ眞理を知らず。第三の說の如くならば物體を實體とする唯物主義は自然教と同じき劣等觀を免るべからず。斯る見解にてはとても客觀の萬物が卽ち理性なりとの關係を會すること能はざるべし。また此客觀界は實體なき奇怪なるものと云はざるべからず。

眞義は、物體は絕對觀念の客觀的觀念態にして、時々隨緣變化し活動するは絕對意志によりて自然律に動く力の實現なりと。而して吾人がこれを知覺することを得るは

客觀として因果律に現ずる觀念態が個人の主觀々念に實現するに外ならず。約して言はゞ堅動等の物體の萬有は意志によりて現ずる客觀々念の實現なり。

宇宙は其統一的總體にして全觀念の主體にして永恒自存なるは如來法身なり。

故に客觀と主觀とは其本質は一體、絕對觀念が物と心とに現はれたるものにて、眞空の實體を離れては客觀世界及び萬物有ることなし。其實體は圓成實性にして、卽ち現象の國土及び衆生一切聖者の身心も十二入十八界乃至如來三身四智に至るまで悉く其本質は眞空の一大心靈なり。此理を得る時は一切の物心の二象を會して一大眞理に歸することを得ん。

相、萬有本體の一に歸す、吾人は此理性に隨ふ。

性、萬有は根底一、故に一理に(解)脫を求む。

二、空卽是色觀

眞空の本質が主觀客觀の萬象となるも其根底は一なり。根底一なるを證せんには自己の精神は他の精神と同じきをもて、人類の精神も進化の原始に遡れば、動物のと同じ形式によりて精神生活を營むものなれば、二者の根底は一なり。動物の劣等なると植物とは心理的內性は差別なく、アミーバの如きは動物とも又植物とも成り得べき性態なり。尙進めば心理の內性は有機物より無機物自然の分子にも不識的意志なかるべからず。自然の現存にもまた不識的意志なかるべからず。言を換へて言はゞ自己に精神あるが如く宇宙自然界も精神なかるべからず。物體と精神とは一體の二面なり。自己を外觀すれば物體のみにして內面より觀すれば全體精神のみ。他の內面は我之を證する能はざるも同一の形式なれば他も我と同じく外面は物質なれども內面は精神なりと推論することを得。人のと同じく內面は不識精神ならざるべからず。之を動植物より乃至無機物より自然の實在にも精神なかるべからず。各個人精神の本體なる宇宙も外面より見れば物質なるも內面は精神ならざるべからず。

物質と精神とは一體の二方面と言ふことを得べし。其根底に於ては一なり。

また能觀と所觀とは即ち現存と意識とは本質一なり。現存の內容は意識と同じく觀念的なり。物の實現は意志の力による。世界の觀念內容が物と現はれたる裡にも同一大觀念の故に認識することを得べし。

實體の內面の動機が外面の因果と現はるる故に、動機と因果とは同一の活動を內外二面より見たるものに外ならず。

二者の本質が一なりとて現象には異なしと言ふべからず。觀念內容は觀念的の故に未だ意識的にあらず。意識內容は意識的の故に現存ならず。

色即是空の理は能觀の意識も所觀の現存も一體にして主觀と客觀とは同一の本質の內外兩面に外ならず。

世界萬物となりて働くも人の精神に活くも之を統一的根底を究め之を統一するものは絕對眞質なり。之によりて解脫を求む。

理論としては、自己の身心及び世界の統一の根底を如來の本質なりと識り、解脱の爲には個人の根底なる絶對即ち如來の目的に致一することを目的とす。

眞空の本質を離れたる現象あることなし。然るに外道及び二乘が執する如く、本體斷空ならば世界は何の根底によらん。

又唯物主義や唯心論者の如く、各一片を執せば眞空が即色と爲すべからず。亦般若の眞空の本質には物質も精神も無しとの偏眞の一面のみを執せば現象と本質一致の理あることなし。

若し主觀と客觀とは一體の兩面にして、宇宙本質は如來一大法身にして、また一切の根底は即絶對の本質なるが故に、座を立たずして如來の中に安立することを得ん。

三、空色無礙觀

世界の相待生滅起伏の物的世界に在つて、絶對に如來に歸依せんとするには、空と

色の無礙ならざるべからず。若し世界は堅固なる物質にして、如來とは相背致し氷炭相容れざるものならば、世界に在りながら如來に絶對的に依屬する能はず。また如來の本質は無碍なる能はず。然るにこの世界は如來の意志によりて現はれたる客觀々念なるが故に、絶對觀念を離れたるものにあらず。觀念態は無礙なり。吾人はいかなる物體の中にも地球にても觀念は物體を徹して無碍に交渉す。

いかにとなれば物體も同一の觀念なればなり。人の意識も外界の物體も同一の觀念なればなり。

斷空論者や唯物論者の如く、世界は單に堅固なる物體とし器械的の動力のみならば、客觀の物體と本質と無礙といふべからざるも、本質は絶對觀念態にして世界は意志に實現せらる。

如來の本質、絶對觀念態、常恒純粹なる本體に比すれば、起伏隱顯究りなき世界的現存として牢固なるものは、夢幻の如く、其本質の客觀的現象に過ぎず。

吾人が物的の肉眼を以て視れば、相待的の世界のみにして、如來の本質と對立することを能はざるも、觀念に於ては、世界に在りながら如來の絶對觀念に依屬することを得、また其觀念の勢能に隨つて活くべきものと信ず。

如來の本質は宇宙の最高等の觀念實在にして、一切世界は其中に在つて無碍なる故に、其性能に解脱靈化せらるるものとす。吾人が解脱の地は絶對無碍なる觀念界に求めざるべからず。

如來の身心徧法界いづれの處か存在せざる所ぞ。觀念態にあるが故に無碍なり。故に吾人は物的の身は世界にありながら、自己の精神は觀念的に觀念的實在の如來に依屬し、如來の目的に協力するものなるを信ず。故に空色無礙觀と云ふ。

有碍の中に在て無碍の觀念態を求む。

四、泯絶無寄觀

初め會色歸空は世界萬物は本質の心に歸する。第二は本質と現象とは一體の兩面なるを明し、第三は本質の觀念態と世界萬物とは相互に無碍なるを說きたり。世界萬物の中に觀念態は無碍なるを、第四は直接に自己の意識が自己の根底なる本質に契合し致一すべきには佛智の啓示によりて證明契悟することを得ん。

前に眞心と妙色とは無碍なりと說きたりと雖も現象を以て眞に心靈なりといふべからず。いかにとなれば若し現象實在が即本質ならば自然的意識に墮せん。また凡聖同見にして二諦なくなりなん。さればとて若し不即にして現象と本質とは不即にして別々なりと云はば物心二元論とならん。生理機制の根底なるが故に本質は人の心靈活動を規定する絕對根底なり。然れども生理規定の心を以て精神生活の全體といふべからず。生理過程は頓て心靈的生活になるべき方便なり。其最深の原因は如來の本質に求めざるべからず。此直接の心理觀念によりて直接に如來の本質と合一することを得ん。之を三昧門と云ふ。

『如來是法界身、入二一切衆生心想中一。』法界とは一大心靈態。自己の根底に求むるに心靈開展靈窓開けり。一切法不可得、不可も亦不可得。迥絶無寄にして心靈開くとき無始の無明曉るとき眞智現前、正體現示。言語道斷、心行處滅、解知を以て到るべからず。是純粹眞理なり。即ち自己の心靈が一大心靈と契合し、分別の智亡じ、此に至つて本質明了に能觀と所觀と同一の本質一致す。さればとて自己の心靈即ち如來の本質といふべからず。いかにとなれば人には生理的機能のために着色せらるること免れざればなり。然れども心靈的本質に於て必ず一致する處あらん。然らざれば能所交渉不可能ならん。

宗教の第一義は絶對依屬すべき地を求むるにあり。絶對無規定の本質に求めざれば常住畢竟の依處にあらざればなり。

第一は現象の物心二象は生滅のものなり。眞空は絶對不生滅なればこれを依處として求むべき眞空界故、生滅の物心二象が同じく眞空より出たるものなれば、終に此に

歸せざるを得ず。生滅の爲に實體なればなり。

第二其實體と生滅の萬象とは一體の兩方面にして異體あるに非ず。

第三一體ならば何の處に於て發見せん。曰く本質は觀念態にてあれば、物心二象の生滅の中に在つて、觀念的に契合することを得ん。

第四は觀念態を本にして如幻の生滅を遣てしまふ。

認識の世界

吾人が現に認識せる世界即ち客觀界を吾人が之を寫象感覺することを得る形而上論はいかん。

實體の三大が即絕對心靈に象相と意志とを屬ふ。象とは絕對觀念態である。心相の方面をのみ觀ずる時は、宇宙は一の觀念態である。心質にすがたあるの性あると共に、即ち活動すべき能力あり。之を絕對意志とす。理性的規律によりて一大觀念態が遍動

力のために發動せられたるが宇宙現象なり。

吾人が世界を寫象することをうるは、吾人が寫象と世界とは同一の觀念態にして、寫象する方を主觀と云ひ、寫象せらるゝ方面を客觀と名づく。亦外觀を物質と名づけ、內觀を精神と云ふこと、同一本質の相を兩面より見たるに外ならず。

主觀と客觀とは同質の故に之を寫象することをう。若し物と心と外觀のみにあらず、本質にも全然異なる物質的實材の物的たらんには、世界をいかにして寫象することを得べきぞ。

感覺的實在の世界萬物の堅固、煖熱、潤濕、動力等の感覺的實質は、一大意志即ち本質の勢能にして、之と吾人の意志力とは同一本質の故に、之に觸れて固形に感覺し、外界の四大本態と內面の意志勢能とは一體の兩面たる故に、吾人は之に感觸す。

一大本質の相は觀念態、力は意志體にして、三能は本體の理性的規律即ち天則秩序によりて時間と空間との形式に因果的に發動せらる。意志の能力によりて物體の堅潤

煖動物體を實現し、觀念態が色聲香味觸等の客觀的の象を呈す。之を三大と云ふ。三大は一大本體の二屬性なり。人の精神に寫象と意志、象相と活動力とを有するが如し三大の中に實體なからんか、誰かこの相をなしこの活動をなさしめん。人が外界に目擊する萬物の因果的に活動するものは、天則的の意志の活動せるものにして、自己の感覺的機能と接するときに、堅煖等を感覺するは、自己の力と投合するものにして、外界の堅煖等と自己のとの力度の高低に隨て感覺を殊にす。人が因果的活動の物體に對する感覺は、堅煖等は意志的性格に存し、此活動によりて、人が彼の物體はいかなる色又形を爲せりと寫象することをうるは、其の力の理性によりて動く人の觀念內容に存すと。

三大を相と能とに於て分別すべくも、其本體は一なるが故に、本質の相を觀念と云ひ、能力を意志と云ひしに外ならざれば、單に客觀即ち物體的世界萬物とせば、萬物を我觀念し寫象することを得るは、奇怪にあらずや。全く本質の相は觀念的にして、

其能力が意志なれば、之が天則の規律に隨つて、物體と現ずるものなる故に、人の主觀的觀念が之の寫象を自己に現ずるなり。

本質に於て一體にして、實在世界と客觀的觀念と本質一體なりとて、現象に於ては一なりと云ふべからず。相と用との能を異にすることを忘るべからず。

物體は力の實現せる客觀觀念なればとて、本質に於て一致せることを拒むべからず。

三大の宇宙世界現象界は觀念態が天則的に一大勢力に發現せらるゝために變化を生ず。

現象宇宙は客觀的方面の一の全面にして、本體は理性的規律により、大勢力は無始以來休息することなく、遍空間に無量の世界體を現じて力のために發現せられて千變萬化す。故に世界に無量萬差の相を呈し、時間的には成住壞空し、生ずれば滅し滅すればまた生じて止むことなく、動物には生住異滅窮盡なし。

本質同一の故に(三大)の觀念と一致し、また觀念は無碍なり。

唯識論に阿賴耶識と云ふは、本質が一切能によりて發現せられたる客觀的觀念的存在の一面を名づけたるに外ならず。

唯識に曰く、一切の有情無始已來法爾として八の識あり。中に於て第八の阿賴耶識是其根本たり。頓に身、器界、種子を變じ、轉じて第七識を生じ、皆能く自分の所緣を變現して、都べて實法なしと。阿賴耶識に見分と相分と自證分を分つ。同一の識態なれども主觀を見分とし、客觀を相分とし、客觀に對する認識を自證分と爲す。

賴耶識とは天則理性に現はれたる客觀的實在にして、賴耶所見の世界形固的物材として、絕對觀念體を離れたる自己特有の實在あるものに非ず。

若し客觀的觀念界は即ち主觀的觀念と同一體にして、本質は絕對的觀念態なれば、吾人が如來の大圓鏡智の光によりて、自から觀念の自性より照すときは、一大觀念的本質と相應して、絕對無碍なり。此一大觀念より認識の物質的固形の實在たる世界を觀ずれば大海の表面に現はれたる影像の如く、幻影にして其存在は觀念的本質の客觀

現象に過ぎず。

賴耶所現の宇宙現象の一面なる客觀存在なる天體無數の星宿が起伏陰顯するは、規律によりて一切能に實現せらるる影像にして、存するが如く亡ずるが如きものなりと。

業識所感

阿賴耶識を業識と名づくる所以は、一切生物が各精神生活生理機能の發達の程度其精神機能のいかんに由りて、受感性を異にす。之を業識所感と云ふ。

例へば青眼鏡をもて見る時は萬物悉く青色を呈すべきが如く、人類は共同的に感覺を共通し、自己の感覺的機能と相應して世界萬物を感ず。

人間世界と動物世界の內面的生活及び世界に對する觀念相同じからず。劣等動物の精神生活には本能的に營養生殖を營むの外、盲目的生活たることは推知せらるべし。

唯識論に一水四見の說あり。曰く、同一の水に對して人類は之を水と見、天人は瑠

璃寶地と感見し、餓鬼は之を熱河と感し、水族は之を人が空氣を感ずるが如し。此生物內面生活の相異ること外面と同じく千差萬別なることを例せるなり。吾人は劣等動物と同じ內面生活にあらざることは疑はじ。

すべての生物が感ずる所は、客觀的觀念の世界態の一面を感ずる外ならざることはいふまでもなし。

宇宙は全觀念絕對意志の全體なり。全觀の絕對主體にして永恒自爾不變一大心靈態を如來と爲す。之が觀念的方面を大圓鏡智と云ふ。

阿賴耶識とは、天然の精神は、自己を中心として我我所を執して、我が物我が世界なりと觀じ、天則の理性已上に自己の根底を意識すること能はず。

自己の精神本一大精神即ち如來の個現體なるを識らず、自己の觀念は如來の一大觀念の個體現なることを意識せざる間を云ふ。自己の身心及び現宇宙は如來の一大觀念が力によりて發現せられたる總體は世界にして一員たるは各個人なりと悟る時は、天

則已上に超えて終局目的の理性如來の一切慧の大圓鏡の方面に相應したるものと稱すべし。

宇宙は一大觀念態

個人は一大觀念中の機制的一員なり。

宇宙の無窮無邊なる、無限量と云ふ外なし。元來絶對にして量を沒したる超空間超時間超數量にして、また遍空間遍時間態の一大觀念態なりと。ハミルトンが曰へる如く、我心の達し得る限りを想像し、其盡る所より順次に最遠の距離を想像し、是の如く展々して無限の時間を要して量るべきも、宇宙の邊際を究むべからず。法華の壽量品に、五百塵點の譬喩あり。たとへ實際に塵點を盡すとも空間時間の盡るべき期あることなからん。

宇宙の無限なるは一大觀念態の無限なり。宇宙は觀念態なればなり。各個人は機制

的の一員なり。其の觀念の本態一大觀念に連絡す。所觀の體無邊際の故に能觀の心もまた無限なり。能觀と所觀とは同一の觀念體が人の機能に顯に顯現したるものなればなり。能觀と所觀の宇宙とは一體の故に、觀念を積みて無限の時間に至るとも所觀も盡きず能觀も盡ることなし。觀念は無窮の觀念を相續するも、其の態は同一體にして區畫を殊にするものに非ず。また觀念態なるものはいかに固形なる物質といへども、一貫して徹照せざるなし。自から觀ぜよ、地球いかに深厚なるも、觀念の爲めには少しも障碍するものに非ず。

智と能との分別

萬物の固形即ち質碍あるもの即ち堅潤熱動空の質は、即ち意志態即ち精神的力と云ふ。

かゝる物心ともに本質と動力を有するも、若し觀念即ち知態なき時は、物心ともに

象相もなく、色もなく、聲もなく、天に太陽もなく、物的の盲動のみにして、森羅萬象なき物體と分子動のみならん。觀念態ありて主觀と客觀との物心二象を顯はし、この二象が種々の象相をなす。如來の絶對觀念をまた大圓鏡智と名づく。

大圓鏡智

大圓鏡智とは、宇宙は如來の觀念態の方面より名づけたるなり。大圓とは一大觀念は絶對にして缺げることなく、鏡とは觀念態の無邊に照映するにたとふ。鏡は相對的に甲の鏡に乙の物象を現ずるが如くに非ず。いかにとなれば宇宙萬有の物心二象は自體に自己の觀が現はれたるものなり。宇宙森羅萬象の生滅變轉の相は、常恒に大圓鏡の影像なり。同一の觀念が內外二面に現れたる象にして、之を統一したる總觀念態を大圓鏡智と名づく。

天則的の識と智との區別

宇宙本一觀念態とすれば、此に繫れる個人も、之全一の個人心なれば本一體分別すべきにあらざるも、生理機能の感覺機制に制限せられて、際限あるを免るゝ能はず。人の感能によらざる觀念と、感覺とは、一方は無限にして一面は有限なり。鏡の內外の內面は狹くして外面は廣きが如く、感覺は機制的に制限せられて狹きに反して、觀念は無限なり。吾人が眼を擧げて天を瞻るとき、圓形にして際限あるが如くなるも、肉眼によらずして觀念による時は無限の觀あり。機制による感覺の方面は識と云ひ觀念の方を智に屬す。天然の機制を超えたる一大觀念たる大圓智の一大觀念の一員たる自觀によりて觀ずる時は、絕對唯一の觀念態なるを識らん。認識より見れば、客觀界の複雜なる、また物のために障碍せらるゝも、觀念には單純にして無碍に靈徹し、空間無限の如き世界萬象も、同じく同一の觀念が主觀客觀の兩面に顯現したる同一性の

ものなり。

內外同一觀念

人の感覺は機制に局限せらるといふも、本一大觀念に繫れることは認識に於て示せり。人の瞳は小さくも、眼を放ちて蒼穹の無窮を仰ぐとき、無數の星宿は燦爛として光りを放ちて瞳點と交涉す。瞳小なりとて廣大なる蒼穹を容れて餘あるものは、一大觀念によりてなると、個人の觀念と靈通するが故なり。

また人の腦裡の感覺的元質なるものは至微幽玄なるも、無邊の空間を收入して尙容るるに餘りあり。是また一大觀念と自己の心質と同一なる故なり。一大觀念態は本物心二質同一の故に、肉眼と肉の腦髓等を透して觀念を爲す。

大觀念の一個人

人の心靈開發して一大觀念と合する時は、十方洞然として窮りなし。自觀と大觀念と同一にして、二相なし。能觀所觀不二なり。空間に徧く時間に徧し。三世を當念に收め、十方を盡して當處に攝す。表面の個人格を失はずして大觀念と一致す。

若しこゝに至る時は、曾て依屬し來たりし刹土は、無數億を盡して一大觀念の局部に過ぎざるなり。無邊の世界が却つて一大觀念中に收入す。

楞嚴に、衆生の無始より已來己に迷ひて物と爲し、本心を失ひて物の爲に轉ぜらる。故に此中に於て大を觀小を觀る。若し能く物を轉ずれば、則ち如來に同じく、身心圓明にして、道場を動かず一毛端に於て徧く能く十方の國土を（　）

觀念體は宇宙を全うして分際あることなく、方隅有ることなく、割裂すべからず分配すべからず。故に一毛端を擧ぐれば全宇宙を攝したる大觀念を擧ぐ。吾人が腦灰白質に三千世界を收むることをうるは圓智態に繫れるが故なり。

圓智即ち一大觀念態は、唯一にして一切萬象を包含し、一切の複雜なる物を開展し、

即ち物心の二象なり。差別の萬象はこの觀念に統一せらる。

一大觀念には、過去も未來も現在の觀念の內面に存在して、外觀は常恒に現在のみなり。內面より發現するが故に三世を當念に收む。常然現在の同時態なり。但に同時態のみにあらず、意識感覺的形式を脫して直觀なり。觀念が現實にして現實が即觀念なり。華嚴に念劫融即と云ふ。空間的にも、發現せられたる萬象其ものには、十方微塵の刹土遠近の距離を立つるも、觀念の絕對自己には、遠近大小の相あることなし。自中の萬象なればなり。

信論に、眞如の相とは大智慧光明の義と云ふは即ち圓智なり。本來一大觀念體なるも、忘心覺らずして、諸の物心二象の相を見る。圓智には恒沙の功德の相を具すれども、而も差別の相なしと云ふは、發現せられたる萬物には萬差の相を呈すれども、能發の智には唯一にして而も差別の相なしとなり。絕對唯一の觀念態を圓智と云ふ。